

第3章

インタビューによる建築デザイン教育の調査

第3章 インタビューによる建築デザイン教育の調査

3.1 調査の概要

3.1.1 調査の目的と内容

第3章の目的は、1.7(2)「大学以前、大学、職場での教育のどれが重要か?それぞれの場で何をどのように学んでいるのか?」という問題を明らかにし、それに基づいて、景観デザインのあり方：初期案の検証と改良への示唆を得ることである。

美的な才能は幼少時の環境の影響が大きいことが分かっている。また、既往研究では、建築設計者一般にとって、大学よりも職場での教育の方が重要であることが分かっている。しかし、優れた建築家にとって、大学以前、大学、職場での教育のどれが重要なのか必ずしも明確ではない。また、それぞれの場で何を学んでいるのかも不明である。

これを明らかにすることは、景観デザイン教育において、大学で教育する内容や、職場で教育する内容を判断するために有益だと考えられる。

3.1.2 調査方法

調査の基本的方法は、建築家へのインタビューである。

具体的には、次の項目について調査を行う。

- (1) 幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築家を志した理由・きっかけ
- (2) 大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと
- (3) 職場での教育の状況と、そこで学んだこと

また、これらに関連して、次の項目についても調査を行う。

- (4) 大学における建築教育に求めること

筆者が直接インタビューを行ったほか、既往研究、参考資料にも建築家に対するインタビューをまとめたものがあり、これらも活用した。

上記(1)の幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響については、後述するように仙田による研究に詳しい。これに筆者のインタビューや参考文献におけるインタビューの内容を加えて、考察を行った。

(2)～(4)についても、筆者のインタビューや参考文献におけるインタビューの内容から考察を行った。

3.1.3 既往研究・参考文献

建築家に対するインタビューをまとめた研究や参考文献について、以下にまとめた。また、これらの資料に登場する建築家のリストを表3-1に示す。

■仙田満「住まい学大系 032 こどもと住まい(上) 50人の建築家の原風景」住まいの図書館出版局, 1990

■仙田満「住まい学大系 032 こどもと住まい(下) 50人の建築家の原風景」住まいの図書館出版局, 1990

この2冊は、50人の建築家のこどものころに関するインタビューをまとめたものである。インタビューの質問項目の中には、「建築家の原風景と創作活動の関連性」や「建築家を志した動機とこどもの頃のあそび環境の関

連性」が含まれており、本研究にとって大いに参考になる。

- 「淵上正幸もっと知りたい建築家 淵上正幸のアーキテクト訪問記」
TOTO 出版, 2002
- 吉田研介「建築家への道」TOTO 出版, 1997
- ジョン・ピーター著, 小川次郎・小山光・繁昌朗共訳「近代建築への証言」
TOTO 出版, 2001
- 東京大学工学部建築学科安藤忠雄研究室編「建築家たちの 20 代」
TOTO 出版, 1999
- 日経アーキテクチャ編「建築家という生き方 27 人が語る仕事とこだわり」日経 BP 社, 2001

以上の5冊は、建築家に対するインタビューをまとめたものである。インタビューの内容には、幼少時のことから、大学時代、職場での修業時代のことが含まれている。

- 芦原義信「建築家の履歴書」岩波書店, 1998
- 実川元子「こんな生き方がしたい 建築家 長谷川逸子」理論社,
2001
- 「JA46: 内藤廣」新建築社, 2002

この3冊は、それぞれの建築家について詳しく説明した書籍であり、それぞれの建築家が建築を志したきっかけや、修業時代のことまでが分かりやすい。

- 都市建築研究編集所編「素顔の大建築家たち 01 弟子の見た巨匠の世界」建築資料研究社, 2001
- 都市建築研究編集所編「素顔の大建築家たち 02 弟子の見た巨匠の世界」建築資料研究社, 2001
- 馬場璋造「日本の建築スクール」王国社, 2002

「素顔の大建築家たち ...」は、副題が示すように、巨匠といわれる建築家の弟子による講演や対談によって、巨匠の生き様を明らかにしようというものである。建築設計における巨匠と弟子のやりとりなどから、職場での建築デザイン教育について示唆を得ることができる。

「日本の建築スクール」は、建築家とその弟子たちの関係をスクールと捉え、師から弟子へ伝えられる内容や、その影響を記述したもので、職場での建築デザイン教育について示唆を得ることができる。

3.1.4 インタビューの質問内容

インタビューの質問内容は、参考文献によって異なるため、それらの中から、次の項目について関連のある部分を抜き出し、次節にまとめた。

- (1) 幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築を志した理由・きっかけ
- (2) 大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと
- (3) 職場での教育の状況と、そこで学んだこと
- (4) 大学における建築教育に求めること

また、筆者が行ったインタビューの質問内容を、以下に示す。これらの内容についても、上記(1)～(4)によってまとめている。

- (1) 幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築を志

した理由・きっかけ

- ・どんな子供だったか？（例 絵が上手、工作がすき、悪戯がすき、ガキ大将、ほか）
- ・どんなところで育ったか？（美的感性を磨く環境だったか？）
- ・小、中、高の成績は？（上、並、下）
- ・建築を志した理由

(2) 大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと

- ・大学を選んだ理由
- ・大学での師匠はだれ？
- ・大学での設計演習の量は？
- ・大学で受けた教育の批評（できれば他大学と比較して）
- ・大学で学んだことで、今役に立っていることは？（精神的なこと、技術的なこと）

(3) 職場での教育の状況と、そこで学んだこと

- ・就職先を選んだ理由
- ・師匠はだれ？
- ・師匠から何を学んだか？
- ・独立のきっかけ
- ・学会賞では何が評価されたのか？
- ・受賞者と非受賞者を分けるものは何か？（運、才能、努力、生まれ、ほか）
- ・大学以前、大学、職場、それぞれで受けた教育や体験のうち、どれが重要か？

(4) 大学における建築教育に求めること

- ・これからの大学教育に期待すること
- ・若い人に才能があるかどうか、有能かどうかいかに見分けるか

3.1.5 調査対象の建築家

3.1.3 で挙げた既往研究や参考文献に登場する建築家、および筆者が実際に面接・インタビューを行った建築家のリストを表 3-1 に示す。

表 3-1 調査対象建築家リスト 背景がグレイの建築家は、筆者が直接インタビューした建築家

氏名	生年	参考文献	氏名	生年	参考文献
Frank Lloyd Wright	1867	近代建築の証言	山本長水	1936	
Walter Gropius	1883	近代建築の証言	Renzo Piano	1937	建築家たちの 20 代
Ludwig Mies van der Rohe	1886	近代建築の証言	香山壽夫	1937	こどもと住まい
Le Corbusier	1887	近代建築の証言	黒川雅之	1937	こどもと住まい
アントニン・レーモンド	1888	素顔の大建築家たち、日本の建築スクール	山下和正	1937	こどもと住まい
竹腰建造	1888	素顔の大建築家たち	相田武文	1937	こどもと住まい
村野藤吾	1891	素顔の大建築家たち	谷口吉夫	1937	こどもと住まい
吉田五十八	1894	素顔の大建築家たち	斎藤義	1938	こどもと住まい
久米権九郎	1895	素顔の大建築家たち	吉島忠男	1939	こどもと住まい
今井兼次	1895	素顔の大建築家たち	室伏次郎	1940	こどもと住まい
堀口捨己	1895	素顔の大建築家たち	安藤忠雄	1941	こどもと住まい
佐藤武夫	1899	素顔の大建築家たち	伊東豊雄	1941	こどもと住まい
Louis Kahn	1901	近代建築の証言	仙田満	1941	こどもと住まい
坂倉準三	1901	素顔の大建築家たち、日本の建築スクール	早川邦彦	1941	こどもと住まい
Jose Luis Sert	1902	近代建築の証言	長谷川逸子	1941	建築家長谷川逸子
谷口吉郎	1904	素顔の大建築家たち	毛綱毅曠	1941	こどもと住まい
前川國男	1905	素顔の大建築家たち、日本の建築スクール	六角鬼丈	1941	こどもと住まい
Philip Johnson	1906	近代建築の証言	坂本一成	1943	こどもと住まい、もっと知りたい建築家
Oscar Niemeyer	1907	近代建築の証言	内田繁	1943	こどもと住まい
吉村順三	1908	素顔の大建築家たち、日本の建築スクール	富永譲	1943	こどもと住まい
Eero Saarinen	1910	近代建築の証言	Bernard Tschumi	1944	もっと知りたい建築家
大江宏	1913	素顔の大建築家たち	吉柳満	1944	こどもと住まい
丹下健三	1913	日本の建築スクール	鈴木了二	1944	建築家への道
吉武泰水	1916	日本の建築スクール	Jean Nouvel	1945	建築家たちの 20 代
leoh Ming Pei	1917	建築家たちの 20 代、近代建築の証言	山本理顕	1945	こどもと住まい
吉阪隆正	1917	素顔の大建築家たち、日本の建築スクール	倉本龍彦	1946	こどもと住まい
芦原義信	1918	こどもと住まい、建築家の履歴書、日本の建築スクール	若山滋	1947	こどもと住まい
清家清	1918	こどもと住まい、日本の建築スクール	難波和彦	1947	もっと知りたい建築家
池辺陽	1920	素顔の大建築家たち	鈴木エドワード	1947	こどもと住まい
石井修	1922	こどもと住まい	岩村和夫	1948	こどもと住まい
高橋てい一	1924		高松伸	1948	こどもと住まい
篠原一男	1925	日本の建築スクール	新居千秋	1948	こどもと住まい
内田祥哉	1925	日本の建築スクール	八束はじめ	1948	こどもと住まい
近江栄	1925	日本の建築スクール	若林広幸	1949	こどもと住まい
菊竹清訓	1928	こどもと住まい、日本の建築スクール	大野秀敏	1949	
阪田誠造	1928	こどもと住まい	新井清一	1950	建築家への道
林昌二	1928	こどもと住まい	渡辺真理	1950	もっと知りたい建築家
横文彦	1928	こどもと住まい、日本の建築スクール	内藤廣	1950	こどもと住まい、建築家への道、JA46：内藤廣
Frank.O.Gehry	1929	建築家たちの 20 代	北山恒	1950	建築家への道
吉田桂二	1930		北川原温	1951	こどもと住まい
戸尾任宏	1930	こどもと住まい	彦坂裕	1952	こどもと住まい
Recardo Legorreta	1931	建築家たちの 20 代	Dominique Perrault	1953	建築家たちの 20 代
磯崎新	1931	日本の建築スクール	高崎正治	1953	こどもと住まい
東孝光	1933	こどもと住まい	隈研吾	1954	こどもと住まい
内井昭蔵	1933	こどもと住まい	大江匡	1954	こどもと住まい、もっと知りたい建築家
倉俣史朗	1934	こどもと住まい	竹山聖	1954	こどもと住まい
鈴木恂	1935	こどもと住まい	古谷誠章	1955	もっと知りたい建築家
宮脇檀	1936	こどもと住まい	小林克弘	1955	こどもと住まい
原広司	1936	こどもと住まい	妹島和代	1956	建築家への道
			木下庸子	1956	もっと知りたい建築家
			團紀彦	1956	こどもと住まい
			坂茂	1957	建築家への道
			小嶋一浩	1958	建築家への道
			マニユエル・ダルティツ	1959	もっと知りたい建築家
			加茂紀和子	1962	もっと知りたい建築家
			曾我部昌史	1962	もっと知りたい建築家
			竹内昌義	1962	もっと知りたい建築家

3.2 インタビューの結果

参考文献におけるインタビューを表 3-2 に、筆者が実際に面接・インタビューを行った結果を表 3-3 にまとめた。

ただし、仙田による「こどもと住まい」の内容は、インタビューの結果が統計的にまとめられているため、この表には含まない

表 3-2 参考文献におけるインタビューのまとめ

氏名	略歴	幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築を志した理由・きっかけ	大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと	職場での教育の状況と、そこで学んだこと	大学における建築教育に求めること
Frank Lloyd Wright		父親は音楽教師で牧師。母親も教師。芸術的環境で育った。 母親が建築家になるようにいった。	大学には行っていない。	シルスピー、サリヴァンに師事。	
Le Corbusier		絵が得意なこどもだった。 父は時計工場の職人、母は音楽を演奏していた。	大学には行っていない。 世界中を放浪した。		
Ludwig Mies van der Rohe		父は石工	大学には行っていない。		
Walter Gropius				ペーター・ペーレンスに師事。	
Eero Saarinen		父が建築家			
Louis Kahn					
Philip Johnson		建築雑誌を見て、建築家を志した。			
Oscar Niemeyer		絵が好きなこどもだった。	建築学校で学んだ。		
Jose Luis Sert		芸術に興味を持っているこどもだった。 美術の本や作品が身近にあった。バルセロナは芸術活動の中心だった。 10代の終わりの頃、友人の影響で建築家を志した。			
Renzo Piano	1937 イタリア ジェノバ生まれ 1964 ミラノ工科大学卒業 フランコ・アルビーニに師事 1970 ピアノ&ロジャース設立	親が建設業を営んでいた。そのため、当然のこととして建設に関わる仕事を選んだ。 出身地ジェノバの風景が、後の創作活動に影響を与えた。	大学は、政治運動で占拠されていた。 大学にほとんど行かずにフランコ・アルビーニの事務所働いていた。 大学には夜寝るために帰った。	フランコ・アルビーニに師事。	自分自身で、モノごとを決定していく力を身につけて欲しい。自由、能力、好奇心が大切。 一見不可能なことを可能とする高度な技術力と能力が必要。 友人は必要不可欠
Jean Nouvel	1945 フランス、フェメル生まれ 1966 ボザールに移る 1967 クロード・バランのもとで働く 1970 事務所設立	こどもの頃に住んだ、17世紀の建築に大きな影響を受けた。 両親は教師だった。 高校1年の時の美術の先生がアッサンをほめてくれた。その後も、面倒を見てもいい絵描きになるうと思うようになった。両親は絵描きには反対で、数学をベースにした勉強をするようにということだったので、妥協して建築に進んだ。 学校の極めて優秀で、ボザールに1位で入学	1968年の5月革命で、ボザールはガタガタだった。 ボザールの教育は、決まったことを毎年繰り返しているだけでつまらなかった。プレゼンの画面が美しいかどうかというような本質的でないことが重視されていた。 在学中から、クロード・バラン、ポール・ヴィリリオのもとで働く。	クロード・バラン ポール・ヴィリリオに師事。 建築には、解は色々あり得るということ、観察する能力、判断力、建築の持つ社会的意味などを学んだ。 建築以外のことも色々学んだ。 師匠に勧められて、独立した。	自分の位置づけ、自分が今何をやっているかという分析能力、自己を診断する能力を学んで欲しい。
Ricardo Legorreta	1931年メキシコシティ生まれ メキシコ国立大学で建築を学ぶ ジョセ・ピラグラに師事 1963年独立	銀行家の息子。 こどもの頃から、メキシコ中を旅行したことが後に、建築創作に影響を与えた。 建築を志した理由は、よくわからない。親は建設とは無関係な、金融関係だが、本人は金融は嫌いだった。	大学・実務・旅行の3つで教育を受けた。 教授との出会い、触れ合いがあった。	ジョセ・ピラグラに師事。 建築に関する規律、倫理、愛情を学んだ。 ワルター・グロピウスに、国内を旅行するように勧められ、あちこちを旅行した。 メキシコの村や町から、特に色彩と光の使い方に関して、強い影響を受けた。 メキシコ特有の、インディアン文化とスペインの文化の融合にも影響を受けた。	形の操作のみにとらわれてはいけない。実際のものの作り方を学ぶ必要がある。 雑誌で見るだけではなく、旅行して体験することが大切。
Frank O. Gehry	1929 カナダ トロント生まれ 17才でカリフォルニアへ移住 南カリフォルニア大学で美術を学ぶ 兵役 ハーバード大学大学院で都市計画を学ぶ ロサンゼルス市のピクター・グルーエンの事務所勤務 パリのアンドレ・ルモンデの事務所勤務 1962 独立	高校の頃、絵画、彫刻、音楽に興味を持っていた。 美術を学んでいたときに、焼き物の先生に建築を勧められ、建築家ラファエロ・ソリアーノに紹介された。 彼の作品を見たときから建築に魅せられた。	日本にいたことのある先生もいて、日本建築の影響を受けた。 ハーバード大学でコルビジェの絵の展覧会があり、強い影響を受けた。 フランスで芸術と建築の融合に感激する。	ピクター・グルーエンの事務所でのローコスト住宅開発、地域再開発、ショッピングセンターのデザインなどに関わる。 プロジェクトの経理的な管理、契約交渉、予算、積算、作業の配分などマネジメント的なことも学ぶ。 役所とのつきあい方、構造、設備、音響などの専門家との共同作業についても学ぶ。 週末は、小規模な住宅を手がける。	

氏名	略歴	幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築を志した理由・きっかけ	大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと	職場での教育の状況と、そこで学んだこと	大学における建築教育に求めること
leoh Ming Pei	1917 中国広東生まれ 1935 渡米 MIT ハーバード大学大学院 Webb & Knapp で勤務 1955 独立		ハーバードでグロピウスに学ぶ。 問題に着手する前に、まず分析することを学んだ。	不動産ディベロッパーと組んで仕事をした。	歴史を学んでから旅をすべき。
Dominique Perrault	1953 フランス中部クレルモンフェラン生まれ 1978 パリ第6建築大学卒業 1979 エコール・デ・ポンスジョセで都市計画を学ぶ 1980 国立高等社会科学大学大学院で歴史を研究 1981 事務所開設	こどもの頃は、トカゲや蛙を捕まえて遊んでいた。 水泳が得意な子供だった。 家族はエンジニアで、自分もエンジニアになる雰囲気だった。しかし、絵を描くことも好きだったので、技術と芸術の妥協で建築を志した。	大学での師匠は、アントワヌ・グランバック。 ポザールの1年生の頃から先生に誘われて実務に関わっていた。 実務と大学の両方が大切だった。		大学は建築の雰囲気とかそういう初歩的なことを学ぶところ。 建築を学ぶのは実務。
内藤廣	1950 神奈川県生まれ 早稲田大学大学院修了 1968 フェルナンド・イゲラス事務所 1979 菊竹清訓建築設計事務所 1981 内藤廣建築設計事務所設立	父親は航空エンジニア。 子供の頃は、近くに坂倉順三の神奈川県立近代美術館があって、よく通っていた。母親が音楽をやっていて、音楽も好きだった。 母の実家の隣に山口文象がいて子供の頃よく遊びにいった。山口文象には、建築が社会とともにできるものだという話をたたき込まれた。 芸術と技術の両方に関わる仕事がしたくて、建築を志した。	大学は、70年安保の余波がのこっていた。 大学での師匠は、吉阪隆正。実感としてとらえていないことをいったり書いたりしてはいけないということ学んだ。建築家としてより、人間として受けた影響の方が大きかった。 坂倉事務所、鈴木恂の事務所でアルバイトをした。	フェルナンド・イゲラスと菊竹清訓に師事。 イゲラスには個人の才能を見せつけられた。あんなに才能のある人間に出会ったことはない。また、アートに対する目を開かせてくれた。 菊竹さんはすさまじい才能の持ち主で、既成の価値観を壊していく力を勉強させてもらった。 独立のきっかけは、吉阪さんが亡くなって、こころで踏ん切りをつけたいと思ったこと。	最近の若い人は意気地がない。建築や都市、社会でおこっていることを自分のこととして思っていない。まちのことや都市のことは、これから長く生きる若い人が強く主張すべきだ。 情報化社会でも旅行は大切。足で稼いだ感性を伴った情報はアイデンティティの土台になる。
北山恒	1950 香川県生まれ 1976 横浜国立大学建築学科卒業 1978 ワークショップ設立 1980 横浜国立大学大学院修了 1987 同大学専任講師 1995 同大学助教授 architecture WORKSHOP 設立主宰 現在横浜国立大学教授	遊びを発明するのが得意な子供だった。 大工道具で遊ぶのも好きだった。 父親は総理府の役人。 絵描きか、彫刻家になりたかったが父親の圧力であきらめ、建築へ進んだ。 香川県庁舎と代々木の国立屋内総合競技場に影響を受けたことも建築を志した理由の一つ。	大学は革命ごっこで騒然としており、つまらないところだった。 大学で受ける設計指導も信用できなかった。 1級建築士の受験資格を得るために大学院に行った。 URTEC（丹下健三事務所）でアルバイトをした。	在学中に事務所を開いたが、仕事はあまりなかった。 マンションの設計で、税金、ローン、材料、施工、設備、ディテールなど徹底的に学ぶ。 キリンのパイロットレストランの仕事で、妥協のない建築の設計ができた。	
新井清一	1950 神奈川県生まれ 中央大学商学部卒業 南カリフォルニア建築大学大学院修了 1991 ARAI ARCHITECTS 設立 現在京都精華大学助教授	父も親戚もほとんど公認会計士という家庭の長男だった。	大学は紛争中だった。 大学の時は、建築やデザイン関連のアルバイトをしていた。 大学院では、スタジオで24時間暮らしていた。かなり鍛えられた。モーフォシスという事務所でアルバイトもした。	モーフォシスで働くが、金にはならなかった。 事務所は全体的に、建築に対する情熱は、すごいものがあつた。	
小嶋一浩	1958 大阪府生まれ 京都大学建築学科卒業 東京大学大学院博士課程修了 1985 シーラカンス設立 現在東京理科大学助教授		京大では、施工現場でのアルバイトで、色々体験した。 京大には、実際に建物を建てている先生があまりいなかったため、大学院は東大（原広司研究室）にした。 大学院では1/3はプロジェクト、1/3は旅行、1/3は家庭教師などのアルバイトをしていた。	大学院在籍時にシーラカンスを設立。最初は何も知らなかったため、実務もやりながら、行き当たりばったりで試行錯誤しながら、構造、法規、図面の描き方などを覚えた。	旅行をして、スライドを何回も眺めるのがよい。
妹島和代	1956 茨城県生まれ 日本女子大学大学院修了 1981 伊東豊雄建築設計事務所勤務 1987 妹島和代建築設計事務所設立	親は普通のサラリーマンで、建築には全く関係ない環境に育った。 建築を志した理由は、消去法で、何となくという感じ。 菊竹さんのスカイハウスに惹かれて建築を志したということもある。	大学は、住宅ばかり教育していた。他の建築についても勉強したかった。 大学院時代は、伊東豊雄事務所でアルバイトをした。	伊東豊雄に師事。 独立のきっかけは、担当していた仕事が一段落したこと。 よく怒られていた。指示待ちではなく、自分でどんどん進める必要があつた。 仕事の段取り、打合せのタイミングなどを学んだ。	
鈴木了二	1944 東京都生まれ 早稲田大学卒業 1968 竹中工務店勤務 1977 早稲田大学大学院修了 1977 独立	両親が、美術的な物に関心があつた。父が絵描き。音楽もよく聞く家だった。 子供の頃、映画もよく見た。 建築を志した理由はよくわからないが、人文系の家族で育ったが学校では理系が得意だったので建築を志した。	大学でも、美術、音楽、映画に熱中した。 大学紛争があつて、大学は混乱していた。	当時はディテールの蓄積がアトリエよりもゼネコンの方がはるかに豊富だったのでゼネコンに就職した。 横総合計画事務所に出向もした。 竹中の方が圧倒的に仕事が多い。横事務所は一つの仕事に時間をかける。 また、竹中は匿名的だが、横事務所は当然だが横さんの考えが第一。 親の病気のため、会社を辞め、大学に戻る。 大学院在学時から実務をこなすようになる。	

氏名	略歴	幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築を志した理由・きっかけ	大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと	職場での教育の状況と、そこで学んだこと	大学における建築教育に求めること
坂茂	1957 東京都生まれ 1978-80 南カリフォルニア大学 (サイアーク) 1980-82 クーパーユニオン在学 1982-83 磯崎アトリエ勤務 1984 クーパーユニオン卒業 1986 坂茂建築設計設立 1995 国連難民高等弁務官事務所コンサルタント	小学生の頃は、大工になりたかった。 中学の夏休みの課題で建築の模型を提出したら、学校に飾られた。それで、建築家になろうと思った。 早稲田の入試でデッサンがあるので、高校1年からデッサンを学んだ。	芸大はつまらないと予備校の先生にいわれて、アメリカの大学に行くことにした。自分が興味を持った建築家は、皆クーパーユニオンで学んでいた。 5学年で150人の学生が朝から晩までずっと課題をやるので、交流が多い。	磯崎アトリエの1年いたとき、才能のある人と知り合いになることができた。 建築の展示会の仕事を数多く手がける。そのつながりなどで建築の仕事も入る。	世界中の建築を見ていない人は、建築家にはなれない。
難波和彦	1947 大阪府生まれ 1969 東京大学建築学科卒業 1974 東京大学大学院博士課程修了 1977 界工作舎設立 現在大阪市立大学教授	子供の頃は、身の回りの動物と遊んでいた。 祖父や親戚が大工だった。 建築を志した理由は、国立屋内総合競技場(丹下)に強い衝撃を受けたこと。また、コルビジェの影響も大きかった。		池邊陽に師事。 師匠から学んだことは、コストパフォーマンスの重視、空間や形態よりも技術や機能を重視すること。	
加茂紀和子	1962 福岡県生まれ 1987 東京工業大学大学院修士課程修了 1987-91 久米設計 1992 セラヴィアソシエイツ設立	小さい頃から面白いなと思う建築が身近にあった。			
曾我部昌史	1962 福岡県生まれ 1988 東京工業大学大学院修士課程修了 1988-94 伊東豊雄建築設計事務所 1994 東京工業大学助手 ソガベアトリエ設立	子供の頃は、田舎で育った。 建築を志した理由は、友達の家が設計事務所、面白そうだったこと。			
竹内昌義	1962 神奈川県生まれ 1989 東京工業大学大学院修士課程修了 1989-91 ワークステーション一級建築士事務所 1991 竹内昌義アトリエ一級建築士事務所設立				
マニュエル・ダルディツ	1959 パリ生まれ 1988 東京大学大学院修士課程修了 1988-92 同大学大学院博士課程 1992 セラヴィアソシエイツ設立	若い頃の友達の家がとても立派だったので建築を志した。			
渡辺真理	1950 群馬県前橋市生まれ 1973 京都大学卒業 1977 京都大学大学院修了 1979 ハーバード大学デザイン学部大学院修了 1981 磯崎アトリエ勤務 1987 設計組織 ADH 設立	子供の頃は、庭で遊んでいた。 小学校では、全然勉強しなかった。 建築を志した理由も良く解らなくて、建築でもやろうかな?という気持ちだった。	京大大学院の時にイタリアに留学し、メディチ家礼拝堂に感激した。	磯崎アトリエ勤務 実際にもものをつくる過程で、ディテールや収まりなど、色々学んだ。 建築をいくつか手がけて、ようやく建築というものが理解できたような気がする。	良い建築作品を数多く見ることが、建築家になるための条件
木下鷹子	1956 東京都生まれ 1977 スタンフォード大学卒業 1980 ハーバード大学デザイン学部大学院修了 1981-84 内井昭蔵建築設計事務所 1987 設計組織 ADH 設立	手先が器用で手芸が得意な子供だった。 子供の頃に見たモデルハウスにあこがれていたのが建築を志した理由。	キンペル美術館を見て感動した。 ハーバードの先生(ミトルスタット)に将来建築家になれると励まされてうれしかった。	内井事務所で勤務。はじめはアシスタントばかりだったが、最後に住宅を担当した。 独立してからは、磯崎と内井の仕事の進め方が違うので面白かった。	
坂本一成	1943 東京都生まれ 1966 東京工業大学建築学科卒業 1971 東京工業大学大学院博士課程を経て武蔵野美術大学建築学科専任講師 1977 同助教授 1983 東京工業大学助教授 1991 同教授	子供の頃は、原っぱで遊んでいた。 建築を志した理由は、特別なきっかけはない。消去法でそうなった。	大学では、篠原一男に学んだ。 学生は研究を行い、設計は長谷川逸子さんなどの職員や研究生が行っていた。 自分は篠原一男にはなれないことを学んだ。自分の限界を悟った。	ずっと大学にいた	
Bernard Tschumi	1944 スイス生まれ 1969 チューリヒ連邦工科大学卒業 1970-80 ロンドン AA スクールで教える 1976 プリンストン大学で教える 1980-83 クーパーユニオンで教える 1983 パリに事務所設立 現在コロンビア大学建築学部ディーン	父親も建築家で UIA(世界建築家連合)の初代会長。 はじめは作家になりたかった。17歳の時アメリカの大都市を見て建築家になりたいと思った。			
古谷誠章	1955 東京都生まれ 1978 早稲田大学建築学科卒業 1980 同大学大学院修了、穂積研究室助手 1990 近畿大学助教授 1994 早稲田大学助教授 スナジオナスカ設立 1997 早稲田大学教授	親も親戚も建築とは関係ない。 高校の頃数学と絵が好きだったので建築家になろうと思った。		マリオ・ボッタの事務所に1年間いた。マリオ・ボッタの評価軸は3つしかなかった。単純、美しい、力強い3つ。評価が単純なので、決断が早かった。	

氏名	略歴	幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築を志した理由・きっかけ	大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと	職場での教育の状況と、そこで学んだこと	大学における建築教育に求めること
大江匡	1954 大阪府生まれ 1977 東京大学建築学科卒業 1977-84 菊竹清訓建築設計事務所 1985 プランテック設立 1987 東京大学大学院修了	母方の祖父が著名な舟の設計者だった。子供の頃は、舟のプラモデルが好きで、一時期は将来は舟をやると思っていた。 実家は寺。 高校の1,2年では文系だった。中学・高校は文芸部長だった。作家になりたかった。 代々木の国立屋内総合競技場に感銘を受けて建築を志した。		坂倉事務所に就職面接にいったが落ち、菊竹清訓の所に行ったら入れてくれた。 菊竹事務所ではどんなものでも、一から考えてデザインしていた。そもそも論からはじまるので、時間がかかった。 菊竹さんは、かなり担当者に任せるので、皆育つのが早かった。	
芦原義信	1918 東京生まれ 1942 東京大学建築学科繰上卒業 海軍に従軍して、軍の施設の建設に関わる 終戦後、現代建築研究所に就職 1952 ハーバード大学院に留学 1953 ハーバード大学院修了 マルセル・プロイヤーに師事 1954 帰国 1955 法政大学講師 1956 芦原義信建築設計研究所設立 1959 法政大学教授 1960 アメリカ留学 1964 武蔵野美術大学主任教授 1970 東京大学教授	父は医者。 母や兄から芸術的な影響を受けた。		マルセル・プロイヤーに師事。	
長谷川逸子	1941 年静岡県生まれ 1964 関東学院大学卒業 菊竹事務所に勤務 1969 篠原一男研究室の研究員 1979 独立	母親が絵が好きで、家に花を飾るのも好きだった。季節ごとに文化的な生活だった。 父は造船所で働いていたが、音楽好きだった。 子供の頃は、日本舞踊を習った。押し花、絵画、彫刻が得意だった。ファッションが好きで、自分でデザインしたりした。 将来は、舟の設計をしたかったが、水産大学は女子は入学できなかった。そのため、設計の仕事として建築家を選んだ。	在学中に菊竹事務所でアルバイトをした。	菊竹清訓と篠原一男に師事。 建築家としての実力がついたので、独立した。	

表3-3 筆者が実際に面接・インタビューを行った結果のまとめ 横文彦氏のインタビュー内容は非公開

氏名	略歴	幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築を志した理由・きっかけ	大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと	職場での教育の状況と、そこで学んだこと	大学における建築教育に求めること
山本長水	1936 生まれ 1959 日本大学工学部（現理工学部）建築学科卒業 1959 市浦建築設計事務所 1966 山本長水建築設計事務所主宰 1999 日本建築学会賞（作品）「中芸高校格技場」	絵は下手だったが、工作は好きだった。 親が木材関連の仕事をしていた。木材に関する知識を子供の頃から自然と身につけることができた。 画家になるほどの才能はないと思ったので、建築に進んだ。芸術的センスより、工学的センスが自分にあると思った。建築のほうが絵画よりも社会的意義があると思った。	大学では大したことは学んでいない。	市浦健に師事。 大学教育よりも、職場での教育の方が重要だった。 市浦さんの建築の表現には不満な点もあった。	建築を評価する際に2つの考え方があるのでは？ 一つは、頭で（理屈で）評価することで、このような建築は、雑誌で写真を見てもすばらしい。このような価値観や設計力は、大学教育で身に付くかもしれない。都会向きの価値観かもしれない。 もう一つは、腹で（五感で）評価するもので、土佐派の家はこちらに属する。このような建築は、雑誌を見ても良さが分からない。田舎向きの価値観かもしれない。このような価値観や設計力は、大学以前の経験が重要かもしれないが、自分はいったい経験をしたわけでもない。 見通しの良さ（ここに魚がいます）が大切。試行錯誤を繰り返しては間に合わない。 早さも大切。人の出来ないことをやるには、10倍の努力が必要で、そのためには10倍早くしなければならない。大学の頃には、早くなかったが、修行しているうちに早くなった。
吉田桂二	1930 年生まれ 1952 東京美術学校建築科卒業 1952 建設工学研究会池辺研究室入所 1957 同退所、連合設計社設立 1992 日本建築学会賞（作品）「古河歴史博物館と周辺の修景」	小さいときから絵が好きだった。 小、中、高の成績は並 絵が好きだったので、美大に入った。	大学では吉田五十八、吉村順三に学ぶ。 大学で学んだことで役に立っていることは、何もない。 大学での設計演習の量は非常に多かった。1年に20ぐらいの課題があったのではない。 大学の頃に、アルバイトで建設業をしていた。簡単な建築工事を設計から施工まで行っていた。これがかかり勉強になった。実学は大切である。	池辺陽に師事。 大学教育よりも、職場での教育の方が重要だった。 実物ができるので気合いが違った。	良い建築とは、風土に根ざした建築である。 建築という作業は、チームで仕事をするので、人柄が大切。口数が多かったり、小生意気なのは駄目。 ADばかりではなく、手書きも教えてほしい。
新居千秋	1948 生まれ 1971 武蔵工業大学工学部建築学科卒業 1972 ペンシルベニア大学大学院修了 1971UA 都市建築研究所に勤める。その後ルイスカーン建築事務所、創和設計などに勤務 1980 新居千秋都市建築事務所設立 1996 日本建築学会賞（作品）「黒部市国際文化センター」	建設会社一家に育ち、同級生も多くが建設会社社員の子息だった。建築に関わることが日常的に身の回りにあった。叔母や父親も絵が得意だった。裕福な家庭だったので、美術品が家に数多くあった。小学校の美術の先生がとても良い先生だった。絵はとても上手かった。常にトップレベルだった。子供の頃から、コンクール入選多数。 勉強は、小学校では優秀だったが、中学でやや落ち込み、中3で盛り返した。 小学校から建築をやるつもりだった。	建築では早稲田に次いで良い大学だったので武蔵工大を選んだ。 大学での師匠は、研究室は鈴木教授だが、広瀬教授にかなり世話になった。 大学での設計演習の量は非常に多かった。ほぼ毎日図面を描いている状況だった。 学部では、たいしたことは学んでいないが、ディテールなどはかなり描いた。武蔵工業大学は、社会を支える中級技術者を育てるところだった。学部では、ドラフトマンとしてのスキルと体力を身につけた。 ペンシルベニア大学の大学院の教育は非常に充実していた。ルイスカーン、ベンチューリ、ハルプリンなどが教えてくれた。大学院で学んだことは、あらゆる面で非常に役に立っている。	学部教育よりも、大学院と職場での教育が重要だった。 ルイスカーンから学んだことは、ものの始まりを考える力。いつでもアマチュアに戻って考えることの重要性。古いものの再解釈。 就職先が倒産したので独立した。	学生が広い視野をもてるようにしてほしい。専門以外にも多くのことを学べるようにしてほしい。学外からも多くの人を呼んで学生に話を聞かせてほしい。 実学を全体の4割ぐらい入れてほしい。 発見をする能力、何かをやるうとする意志と持続力、国語の力も大切。
高橋てい一 （‘てい’の字は、へんは青、つくりは光）	1924 生まれ 1949 東京大学第二工学部建築学科卒業 現職：（株）第一工房代表取締役 1956 武蔵工業大学助教授 1970 年日本建築学会賞（作品）「佐賀県立博物館」	絵が上手だった。工作も好きだった。悪戯好きのガキ大将だった。 中国の青島に生まれ、12才までいた。ドイツによる占領の歴史があったので、西洋的、近代的な都市だった。その影響は大きかったと思う。外国人も多かった。 小、中、高の成績は並	建築を志した理由は特にない。 横浜工業高校で飛行機の制作を学んでいた。このころはよく勉強したが、終戦になったので、勉強は無駄になった。あまり勉強しなくても良さそうなどころとして、東大の第2工学部に進んだ。 大学では坪井研にいた。将来は意匠に進むつもりだったが、学部では構造を勉強した。 大学での設計演習の量は特に多いとは思わない。普通ではないか。 大学では文学部などにも顔を出して、様々なことを学んだ。数学もとてもおもしろかった。しかし、大学で学んだことで、今役に立っていることはあまりない。人脈だけではないか？	大学教育よりも、職場での教育の方が、圧倒的に重要だった。 就職先を選んだ理由は、偶然大学の先生に紹介されて、通信省に入った。 師匠は吉武泰水、小坂秀雄、堀口捨己の3人。師匠から建築の理論、アーキテクチュラルスピリッツを学んだ。 大阪芸大のコンペに勝ったのがきっかけで独立した。	広い視野の人を育ててほしい。体を動かしながら、モノと対峙することを大切にほしい。スキンシップが大切であり、E-mailのやりとりでは駄目だ。 デジタルだけでなく、アナログも大切。
大野秀敏	1949 生まれ 1972 東京大学工学部建築学科卒業 1975 東京大学大学院修士課程修了 1976 横総合計画事務所 1983 東京大学助手 1984 アプル総合計画事務所顧問 1988 東京大学助教授	絵が上手、工作好き。 ごく普通のサラリーマン一家に育つ。 高校の時、先輩の話を聞いて建築を志した。もの作りに興味があったので、建築か、造船をやりたいと思った。	大学での師匠は、芦原さんと香山さん。 設計演習の量は、非常に多かった。大学は、やりたいことができたので、楽しかった。	横文彦の建築が良かったので、就職した。設計の進め方や、人に対する接し方を学んだ。 6年ぐらいして、独立のめどが立ち始めたところに、大学の助手の話が来た。 大学以前の教育、大学教育、職場での教育はどれもオープンに重要。	歴史の講座があることと、設計教育があることが、建築の特徴である。 総合人を養成すべき。 カッコいいと思わないと、若い人は集まらない。 若い人の話し方や対応を見ていると、有能かどうか判断材料になる。

氏名	略歴	幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築を志した理由・きっかけ	大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと	職場での教育の状況と、そこで学んだこと	大学における建築教育に求めること
伊東豊雄	1941 生まれ 1965 年東京大学工学部卒業 1965 菊竹清訓建築設計事務所勤務 1971 アーバンロボット設立 1979 伊東豊雄建築設計事務所に改称 1986 日本建築学会賞（作品）「シルバーハット」	絵や工作が好きだった。小さな時に、絵を習わされた。ラジオをつくったりするのが好きだった。野球が好きで、高校までやっていた。 ソウル生まれ。終戦前に引き上げた。親は建築には無縁だった。父親は絵や陶磁器に興味を持っていた。諏訪湖に面する家で育ったが、そのことが、曲面を使う建築に影響しているのかもしれない。中学3年から東京に出た。 親が教育熱心で、学校の成績も良かった。	はじめは、東大の文1を受けたが落ちた。エンジニアになるうと思って、理1を受けた。この事典では、建築家になるうと思ったわけではない。建築に目覚めたのは、菊竹事務所に就職してからである。建築を志した理由も消極的で、大学2年の進学振り分けで、建築は行きやすい所だった。そのぐらいしか行けるところがなかった。 大学時代は、あまりポリシーがなかった。構造系(坪井研)に行こうと思ったこともあるが、吉武研に入った。しかし、ほとんど研究室には顔を出さなかった。丹下研にも惹かれるものはなかった。 大学では週3日ぐらい設計演習だった。大学の製図室ではなく家でやっていた。そのような学生も多かった。設計演習の時間が多ければ効果があるとも思えない。当時の大学教育はいい加減で、勝手にやっているという感じだった。 大学で学んだことで、今役に立っていることはあまりない。自由なのが良かった。仲間ができたのが収穫。石井和紘、石山修、毛綱毅曠、渡辺豊和などと良く議論をした。 当時は丹下研に磯崎さんや黒川さんが出入りしていた頃で、先端的なことをやっているという雰囲気味わえたのは良かった。 4年の夏に、菊竹事務所にアルバイトに行った。当時は菊竹さんがデビューした頃だった。このときに初めて建築に目覚めた。	大学驚異距離も職場での教育の方が圧倒的に重要だった。 4年間菊竹事務所にいた。菊竹さんは怖い人で、先生が来ると事務所がシーンとなった。そのほかに、尊敬する建築家として、篠原一男、磯崎新の影響を受けた。 師匠から学んだことは、物事が決定される瞬間の集中力。菊竹さんと松井源吾さんとの議論の最中に、よくことが進んだ。先生の存在感、スケール感が大きかった。人間としての魅力があった。 独立のきっかけは、菊竹事務所でのプロジェクトが、なかなか実現しなかった。大阪万博のワーキンググループに送り返されたが、そこでの仕事もつらくなってきたので辞めて独立した。実際は69～71年頃はブラブラしていた。	少人数の塾のような教育が重要ではないか。現在10～15認定どの学生を相手に非常勤講師をしているが、12人ぐらいが限度ではないかと思う。教員を揃える場合に、同じようなコンセプトを持った教員を揃えることが重要だと思う。 最近の若い人は、おとなしい。自分の考えを持っていることが大切で、受け身だけではダメ。 新しいコンセプトを提示するために、常識にとらわれないことをいつも考えている。所員と議論をするときも、できるだけ先の見えない方向に進むように心がけている。 しかし、独りよがりではいけないので、チームで議論をして検討するのが大切である。
仙田満	1941 生まれ 1964 東京工業大学工学卒業 1964 菊竹清建築事務所勤務 1968 環境デザイン研究所代表 1984 琉球大学教授 1988 名古屋工業大学教授 1992 東京工業大学工学部建築学科教授 1997 日本建築学会賞（作品）「愛知県児童総合センター」	絵や工作は大好きだった。ラジオの工作、雑誌の付録の工作、椅子の制作などが好きだった。発明家になりたかった。本も好きだった。 育った環境は、特に感性を磨けるような環境ではなかった。横浜の保土ヶ谷で育ったが、街並みが美しいような場所ではなかった。ただ、自然が多く残っていて、自然の中でよく遊んでいた。 父親は高学歴ではなかった。 小学校低学年の成績は、あまり良くなかったが、3年ぐらいから上向いてきた。数学が得意だった。小学5、6年の図工の先生がとても良い先生で、図工で賞をもらったりしていた。 中学では文学にのめり込んだ。 高校では映画にのめり込んだ。湘南高校という神学校に入学したら、周りは秀才ばかりで、自分もよく勉強した。高校は1学年500人ぐらいで10番目ぐらいの成績だった。	大学を選んだひとつの理由は、エンジニアにとっぴりと浸かるのがいやで、文理の中間を目指していたことだ。中学の頃に東工大に経営工学科ができたので、東工大に入った。高校の頃は建築には興味がなかった。もうひとつの理由は、高校の自分より上位の学生が皆東大に行くので、東大には行きたくなかった。早稲田の電気も受けた。 建築を志した理由は先輩の影響。先輩のやっている建築がおもしろそうだった。 大学では谷口吉郎研究室にいた。しかし、先生はほとんど授業をしなかった。清家さんの講義も冗談ばかりだった。大学で受けた教育はかなりいい加減だった。 大学での設計演習の量は多く、午後から夜にかけていつも製図室にいた。 大学で学んだことで、今役に立っていることはあまりない。卒業論文・卒業設計のコンセプトは、今でも続いている。友人や先輩との人脈が役に立っている。	就職先は大企業に行くつもりはなかった。増沢洵さんの事務所に行きたかったが落ちた。篠原一男さんの紹介で、菊竹さんの事務所に入った。 師匠は、菊竹さんと、当時菊竹事務所にいた内井昭蔵さん。師匠から学んだことは、仕事は向こうから来ないということ。事務所の中でも、提案しなければ仕事は来ない（事務所の中で立場が作れない）。言われたことだけをやっていただけでは怒られた。案をたくさん作ることを学んだ。事務所は能力給だった。かなり多くいただいていた。 独立のきっかけは、菊竹さんとの議論で勝てるようになってきたことと、貯金もできた。それまでに親戚の家の設計などをこっそりやっていた。	かつては大学教育よりも職場の教育の方が重要であったが、これからは大学院が重要になるのではないかと？ アーキテクトとエンジニアの両方を学ぶのは、今後必要だろう。今の大学院教育はまだまだダメだ。若い人に必要なことは、感覚的な点、表現する能力、挑戦する力とやる気。
香山壽夫	1937 生まれ 1960 東京大学建築学科卒業 1964 ペンシルバニア大学大学院修士修了 1968 九州芸術工科大学助教授 1971 東京大学助教授 1986 東京大学教授 1997 明治大学教授 2002 放送大学教授	絵が上手、工作好き、悪戯好き、ガキ大将だった。東京生まれで満州育ち。 満州の計画された都市は見事だった。 小学3年まで満州にいた。その後は新潟の田舎。 小・中・高の成績は上位だった。 一族には医者と法律家が多かったが、自分はライトの建築の写真をよく見ていたのが建築を志すきっかけとなった。	大学を選んだ理由は、兄弟が皆東大で、身近だったことと、勉強すれば確実に入れたこと。 大学での師匠は、吉武さんとルイスカーン、ベンチューリ。 設計演習は、今と同様にとっても多かった。 設計演習での講評は、アメリカの方がしっかりとしていた。 大学（日本）で学んだことは、個人的にはいろいろあるが、組織的にはあまりない。アメリカで学んだことはとても役に立った。	九州芸工大の小池先生にスカウトされて助教授になった。 学会賞では、造形や空間も評価されたようだが、あのころから企画も評価されるようになったと思う。昔の丹下研究室はアトリエに近かった。大学とアトリエの区別が曖昧だった。 今は、大学で設計の仕事を受けるのが難しい。これからは大学で修行することが難しくなる可能性もある。	明るく、ポジティブな人がデザイナーにむいている。暗い人は研究者向きである。 手が早く、腰の軽いことが大切。 発想することと、まとめ上げることの両方ができる人は滅多にいない。建築は共同作業であり、長所を出し合う良いチームを組むことが大切。 大学教育で「研究の最先端のことを話せば良い講義になる」というのは間違っている。 今後は大学院教育が重要となるだろう。教育内容や手法は未だ明確ではない。

3.3 調査結果に対する考察

3.3.1 幼少時～大学以前の環境や教育の状況とその影響。建築を志した理由・きっかけ

図 3-1 こどもの頃の住まいや遊び環境そして空間体験と現在の自分の仕事の関係度

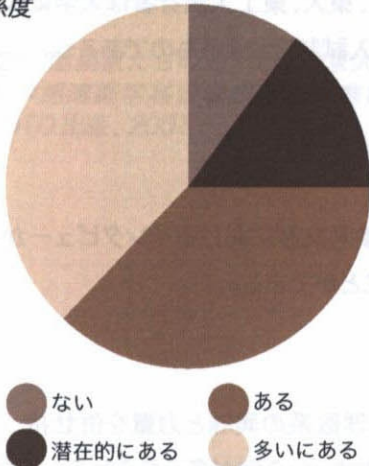


図 3-2 建築家にとって現在の仕事と関係がある原風景の要因

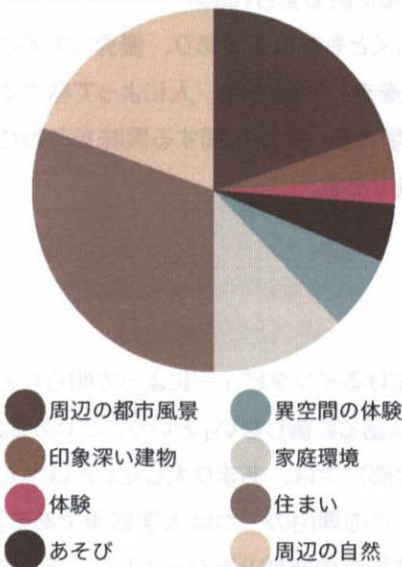
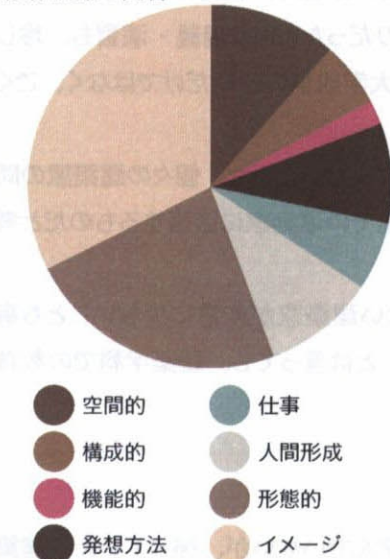


図 3-3 原風景が影響を与える建築家の創作活動の内容



これについては、既往研究として紹介した仙田による「こどもと住まい」調査に詳しい。また、これ以外の参考文献に出てくる建築家のインタビューや、筆者のインタビューの結果も仙田の研究を裏付けるものである。

仙田の研究によれば、建築家にとって幼少時の環境の影響が非常に大きく、重要であることは明らかである。以下にその内容の一部を要約する。

(1) 建築家の原風景と創作活動の関連性

こどもの頃の住まいや遊び環境そして空間体験と現在の自分の仕事の関係については、9割の建築家が関係があると述べており、4割の建築家は極めて強い関係があると述べている。(図 3-1)

また、具体的な原風景の要因としては図 3-2 に示すような結果となっている。住宅や周囲の自然、周囲の都市的状況が重要であることが分かる。

さらに、これらが建築家の創作活動あるいは作品のどのような部分に影響しているかを調べたものが図 3-3 である。形態的特徴全般、創作物の持つイメージ、空間的特徴、機能的特徴、モチーフといった創作物の形態的特徴への影響を合わせると7割強におよんでいる。

(2) 建築家を志した動機とこどもの頃のあそび環境の関連性

● 工作少年、図画少年、理科少年

7～8割の建築家は、こどもの頃、絵描きになりたかった、工作・模型、理科実験が好きだった、発明少年だった、という。

● 時代

戦前にこども時代を過ごした建築家は、飛行機的设计にあこがれていたが終戦後に航空学科が無くなって建築に転向した例が見られる。戦後の復興期に少年時代を過ごした建築家は、その時代に脚光を浴びていた工業デザインやグラフィックデザインから建築に転向した例が見られる。このように、時代はこどもの夢としての職業の志望に大きく関係している。

● ものづくりの環境

こども時代の住まいの周辺がものづくりの環境であったという例はきわめて多い。近所に工場や工房があり、職人さんたちが住み、いつも物をつくるのを見る環境に育ったというのは、約 50% もいる。こどもの頃、ものをつくるおもしろさ、楽しさみたいなものを実感して日常的に体験できるということが建築家を志す環境であるのかもしれない。

● 人的環境

建築家を志望する環境の要素として、もうひとつ人的な環境があると考えられる。例えば、父親や親戚など親しい人が建築家で、いつも建築が身近な存在であったという環境である。そのような人的・社会的環境の中から建築家になろうと決めた人も多い。

● 文科系+理科系

工作少年、理科少年でもなく、物的、人的環境に恵まれていたわけで

もないが建築家になった例も多い。建築は文科系、芸術系、理科系を総合した領域を持つものであるため、こどもの頃の志向、環境を越えて様々なアプローチがあることも示されている。

●決断の時期

小学校の頃から建築家になろうと決めていた人は少ない。80%の建築家は大学の入学前後に決めている。特に、東大、東工大出身者は大学に入ってから建築を志望した人が多く、これは入試制度によるものであろう。

以上が、仙田の研究成果の要約である。

このほかに、筆者のインタビューや参考文献におけるインタビューから明らかになった点を次のようにまとめることができる。

(3) 建築を志すこどもの資質

絵画、彫刻などの芸術的センスと、理数系の興味と力量を併せ持っている場合に、それらの総合として建築を志すという例が多く見られる。また、芸術家を志すものの親が反対したので建築に進んだ例や、芸術的な内容と社会的な意義の両立のために建築に進んだ例も見られた。

また、小、中、高校の成績は、少なくとも並以上であり、優秀であることが多い。大学を選んだ理由や、建築を志した理由は、人によって様々であるが、伝統のある大学へ入学できる学力と、建築に関する興味をあわせ持っていたことが多くの建築家の共通点である。

3.3.2 大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと

(1) 語るに値しない大学（学部）教育

筆者のインタビューや参考文献におけるインタビューによって明らかとなったことを端的に言えば、「学部教育は語るに値しない」ということである。

筆者のインタビューでは、大学（学部）では、あまり大したことは学んでいないと多くの建築家が述べている。この理由の一つは大学紛争である。現在活躍中の建築家の在学時は、大学紛争の時期と重なっており、どこの大学でも、まともな教育は行われていなかったようだ。もうひとつの理由は、かつての大学は研究期間としての意味合いが強く、教育は軽く扱われていたということである。ほとんど休講ばかりだったという講義・演習も、珍しいものではなかったようだ。この傾向は大学紛争の時期だけではなく、ごく最近まで続いていたようである。

したがって、大学教育が重要視されていないことは、個々の建築家の問題ではなく、日本の建築学科で学んだ全ての建築家に該当するものだと考えられる。

しかし、一方で建築学科を出ていない建築家が非常に少ないことも事実である。「大したことは学んでいない」とは言っても、建築学科での教育は必要不可欠なのである。

(2) 雰囲気

「大学（学部）では、大したことは学んでいないが、強いていえば建築

[1] 例えば、内井昭蔵「建築科の講義」
建築雑誌 1998 年 12 月号、倉本龍彦
「真剣勝負を見ている」建築雑誌 1998
年 12 月号

[2] 「建築家たちの 20 代」東京大学
工学部建築学科安藤忠雄研究室編、
TOTO 出版、2001

家の雰囲気を学んだ」と、数人の建築家が述べている。この「建築家の雰囲気」という言葉は、建築教育関連の文献に頻出^[1]するキーワードであるが、その実態が良く分からないため筆者のインタビューで質問してみた。その結果、「雰囲気」という曖昧なものの実態は、建築家の先生（プロフェッサー・アーキテクト）の服装であったり、部屋の内装、趣味、話し方、建築に対する情熱などであることが明らかとなった。

「建築家たちの 20 代」という書籍^[2]は、東京大学建築学科で行われた外国の著名な建築家による連続講演の記録であるが、この中で安藤忠雄東大教授が次のように述べていることは、「雰囲気」の本質と重要性を分かりやすく表現している。

なぜ彼らを招くことにしたのか。われわれの若かった頃は、そんなことを問う必要もなかった。世界的に有名な建築家の後ろ姿を見るだけでも身震いし、自分もいつかあんな風になれるかと夢をふくらませたものだ。

しかし、最近の学生はずいぶん冷めている。あの建築家なら雑誌でよく知っているし、作品の疑似体験だって CD-ROM でいつでも可能だ、という具合に。

現代の高度の情報化された環境のなかでは、現実の人やものに触れて感動するという機会が著しく減っている。しかし、いくら情報が溢れ、コンピューターを介して世界のどこでも瞬時にアクセスできるようになったといっても、やはり単なる情報と直接の体験は比べようもない。特に生きること、つくることの大変さを身をもって知る人が、直接目の前で語りかける場に居合わせることは、その人の存在全体から放たれるエネルギーや刺激を教授できるまたとない幸運である。

建築を学び始めて間もない若い学生たちに、彼らの話の内容が直接影響を与えることは少ないかもしれないが、世界の第一線で活躍している建築家の存在、息遣い、しぐさや言葉の選び方、折々の表情にそれぞれの人の積み重ねてきた人生が読みとれ、将来の自らの道を歩むとき必ずそれらが思い出され、生きる力になるであろう。（建築家たちの 20 代 6～7 ページ）

(3) 仲間

筆者のインタビューでは、数人の建築家が、大学で建築仲間ができたことの重要性について話をしてくれた。仲間ができることで、在学中のみならず卒業後もお互いに切磋琢磨できることや、仕事の紹介につながる事が重要だということである。

これに関しては東大教授の鈴木博之が「場としての大学」について次のように述べている。

そこで何の課題をやったから、何の科目をとったからということが直接どうということはないかもしれませんが、やはり大学が"場"を与えてくれている。（中略）最新のデータを習ってもそれはすぐに遅れたものになってしまうけれども、

そのときそこにいたから行けたとか、あるいは誰かに出会えた、誰と知り合えた、何に触れられたということ、全体から見ればそういうものを一番与えられる場所というのは、やはり大学ですよ。(建築家たちの20代 201-202ページ)

(4) 基本的なスキル

設計演習の量が多かったと多くの建築家が述べていることから、少なくとも基礎的なスキルは学部で身につけたものと思われる。設計演習の多さは圧倒的で、大学生活のほとんどを製図室で過ごすといっても過言ではない印象である。生活の基本が製図室にあり、製図室から講義に通い、製図室から睡眠と洗濯に帰るという感じである。

(5) 大学院教育

学部教育が重要視されていないのに対して、大学院での教育は、比較的重要視されている。特に欧米への留学者は充実した大学院教育を受けたと述べているため、その教育内容は調査する価値のあるものだと思われる。

3.3.3 職場での教育の状況と、そこで学んだこと

(1) 圧倒的に重要な職場での教育

筆者のインタビューにおいても、参考文献におけるインタビューでも同様であるが、大学の教員の印象が薄いのに対して、職場での師匠の影響は遙かに強い。

ほとんど全ての建築家が、大学教育よりも、職場での教育の方が重要であると述べるか、そうでなければ大学教育を無視している。職場での教育の重要性は圧倒的であり、在学時でさえ大学ではなく設計事務所でのアルバイトの方が建築を学ぶ上で重要な役割を果たしているようである。

職場では、実際にものができるので、力の入り具合や迫力が大学とはまるで異なるということを多くの建築家が述べている。この意味で、大学でも実学をなるべく多く取り入れてほしいという意見が多い。また、建築の修行は職人的な部分が多く、師匠からマンツーマンで学ぶ部分が重要であるようだ。

(2) 職場で学ぶこと

当然であるが、職場では建築設計に関するありとあらゆる事を学んでいる(表 3-4)。この中で特筆すべき点を以下に述べる。

(a) 自分の考えを持つこと

建築家がインタビューに答えるときに、師匠から学んだこととして力説することは「自分の考えを持つこと」である。建築では「どこでも、いつでも、だれにでも通用する普遍解」は重視されず、独自のコンセプトの設定とその具現化が重視されていることが、インタビューの端々から感じられる。建築家は過去の作品や人物から受けた影響を率直に認めるとともに、自分のオリジナリティを強く意識しており、過去の作品のコピーは(それが優れたもののコピーであっても)ほとんど無意味だと考えている。

表 3-4 建築家が職場で学ぶ内容

設計に関すること	設計以外のこと
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを持つことの重要性 ・建築史 ・建設の文化・芸術的側面 ・建築の思想、理論 ・形態の美しさ（プロポーション、構図、仕上げ、ディテール、納まりなど） ・場の読み方、コンテキスト、風土や歴史文化と意匠 ・プレゼンテーション能力 ・機能と形態、空間構成 ・都市計画、まちづくり ・構造、材料、施工 ・設備（光、音、熱など） ・積算 ・法規 	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事に対する姿勢、情熱 ・施主との対話の姿勢、折衝の仕方、設計料の交渉方法 ・共同設計者やメーカーなどとの話し方 ・段取りの立て方 ・意志決定の方法 ・事務所の経営方法 ・建設には直接関連しない文化的・教養的な内容

(b) コミュニケーションの力

上記のように、意志決定が客観的な価値基準に依らないため、プレゼンテーション能力や施主との対話の姿勢などのコミュニケーションの力が重要視されている。

3.3.4 大学における建築教育に求めること

建築家が、これからの大学教育に求めることや、若い人に身につけて欲しいと求めることは、次のように、建築家によってさまざまである。これらの中で、多くの建築家が重要視しているのは「旅行」である。優れたデザインを行うためには、良いものを数多く見る必要があるということである。

- ・世界中を旅して、良いものを数多く見ること
- ・自分自身で、物事を決定していく力
- ・自分の位置づけ、自己分析・診断能力
- ・物事の本質や重要な点を素早く見極める能力
- ・好奇心、挑戦する力
- ・広い視野と教養
- ・常識にとらわれない自由
- ・友人
- ・共同作業を上手く行える人柄
- ・手が早いこと
- ・手書きで図面を描く能力
- ・体力、持続力、忍耐力、やる気
- ・国語の能力
- ・大学でも実学をなるべく多く取り入れること
- ・建築の雰囲気

3.3.5 その他

(1) 建築家の資質

筆者のインタビューや参考文献におけるインタビューでは、調査の目的以外のことについても、様々な示唆を得ることができた。その一つに、建築家になるための資質がある。

- ・建築家は楽天的でなければならない。
特に、アトリエの建築家は、会社の先行きについて悲観的になっていてはつとまらない。
- ・建築家は強引で、かつ説得力を持たねばならない。
力強く、ねばり強く、上手にコミュニケーションしなければ、共同作業である建築はできない。
- ・建築家はタフでなければならない。
仕事は精神的にも肉体的にもキツイ

(2) 伝統と人脈

受賞者の出身大学が非常に偏っている状況は、一つには大学教育の内容の差異が原因であるが、それに加えて大学の伝統に基づく人脈の重要性がインタビューによって明らかとなった。

伝統のある大学には、その大学出身の著名な建築家が非常勤講師で教えに来ており、優秀な才能のアルバイト、進学、就職につながっている。このことが、将来の優れた建築家の育成につながっているようである。

3.4 結論

3.4.1 調査結果

(1) 職場での実務教育が最も重要であり、職場は建築スクールとなっている

優れた建築家の育成には、職場での実務教育が、大学以前の教育や、大学教育よりも圧倒的に重要である。その理由は、大学教育が紛争などの理由により未成熟だったということもあるが、職場は実践の場であり、真剣勝負の場であるという点も大きい。

優れた建築家のもとには、大学での人脈によって優れた才能が集まり、建築スクールとでもいうべきものを形成している。そこでは、建築デザインに必要なあらゆる要素が、実践という真剣勝負の場において、師匠から弟子へと伝えられている。その中には、本や雑誌、web などからは得ることができず、個人から個人へと直接伝達されるものも多く、この点が建築デザイン教育において、ことさらに「師弟関係」が重視される理由である。

(2) 職場での建築デザイン教育の内容

職場での建築デザイン教育では、表 3-4 に示したように、様々なことを学んでいる。その中でも特に「自分の考えを持つ」というデザインの意志決定能力が重視されている。

(3) 優れた建築家は、大学教育によって建築の基礎や雰囲気学ぶとともに、人脈を築いている

建築家が大学で身につけたことを大まかに分類すると、建築の基礎、建築家の雰囲気、人脈の3つである。

(a) 建築の基礎を学ぶ

優れた建築家を多数輩出する大学では、設計演習に非常に多くの時間を割いており、建築の基礎的な知識や技術を学んでいる。

(b) 建築家の雰囲気

「建築家の雰囲気」とは、建築教育関連の文献に頻出するキーワードであるが、その実態は、建築家の先生（プロフェッサー・アーキテクト）の服装であったり、部屋の内装、趣味、話し方、建築に対する情熱など、建築家という生き方とでもいうべきものである。これらは、学生に建築に対する夢や感動、建築家という職業への憧れ、困難に立ち向かう勇気や生きる力を与える効果がある。

(c) 出会いの場としての大学

大学の機能の一つとして、出会いの場の提供がある。建築家の雰囲気を味わったことや、建築事務所でのアルバイトの経験、大学時代の人脈は、後の建築家の活動に大きな影響を与えている。人と人の出会いが、優れた才能を見だし、活躍の場を与えることにつながっている。

(4) 旅行をして良いものを数多く見ることが重要

建築家が大学生に求めることは建築家によって様々であるが、「旅行をして良いものを数多く見ること」は、多くの建築家が重視している。

(5) 大学以前の教育は、建築家を志すきっかけを与え、建築家に必要な才能を芽生えさせている

幼少時から高校時代の環境が建築を志すきっかけとなったり、原風景が後の創作活動に影響を与えていることが、既往研究やインタビューの結果から明らかとなった。また、建築を志す子供の資質として、絵画、彫刻などの芸術的センスと、理数系の興味や力量を併せ持っている例が多く、学校の成績も優秀であることが多い。

また、大学教育と、大学以前の教育のどちらが建築デザイン教育にとって支配的な要因であるかという点は、明らかにはならなかった。これは、どちらが重要であるかという問題ではなく、それぞれから学ぶ要素が異なっているため、比較する意味が薄いように思われた。

3.4.2 景観デザイン教育のあり方：初期案の検証と改良への示唆

調査結果より、景観デザイン教育のありかた：初期案について、いくつか検証され、また示唆を得ることができた。

(1) 教育目標：どのような人材が必要なのか

(a) デザイン的思考による意志決定能力の重要性

前述のように建築家が師匠から学んだこととして力説することは「自分の考えを持つこと」である。これは、景観デザインにおいても適用できると思われる。このようなデザイン的思考による意志決定能力の重要性は、初期案に含まれており、今回の調査によって検証された。

(b) コミュニケーションの能力

建築デザインにおける意志決定は客観的な基準に依らないため、自分の考えで他人を説得するためのプレゼンテーションやコミュニケーションの力が重要である。これは、景観デザインにおいても同様である。コミュニケーションの能力の重要性は、初期案に含まれており、今回の調査によって検証された。

(c) 基礎的概念、基礎的スキル

基礎的概念やスキルは、大学での建築デザイン教育の重点である。特に設計演習による基礎的スキルの訓練が充実している。

基礎的概念やスキルは初期案にも含まれており、今回の調査によって検証された。

(d) 感性、ものづくりへの興味と情熱

建築家の才能や感性、ものづくりへの興味と情熱は、大学以前の環境や教育の影響が大きい。これは、景観デザイン教育においても同様だと考えられる。

初期案で教育目標に含めた「才能、ものづくりに対する興味」が、大学以前の要素が大きいとすると、このような資質を持つ学生を、どのように集めるかという、大学入試の問題になる。

(e) 人脈

建築デザインでは優れた才能が優秀な建築家のもとに集まることによって、建築スクールを形成している。初期案には人脈は含まれていないが、これを追加する必要がある。

(2) 教育内容

表 3-4 に示した建築デザイン教育の内容について、従来の土木デザイン教育との比較を行い、両者に共通の項目と建築デザイン教育独自の項目に分類したのが表 3-5 である。インタビューにおいて建築家が師匠から学んだこととして力説する項目は、表の左側（建築独自の項目）のものが多く、このような建築デザイン教育では中心的な項目が、従来の土木デザイン教育では抜け落ちている。

景観デザイン教育では、表の左側の項目も重視するべきであろう。また、3.3.4 で示した、建築家が大学教育に求める内容も参考になる。これらに基づいて初期案の教育内容を改良することが望ましい。

表 3-5 建築デザイン教育と従来の土木デザイン教育の、教育内容の比較

建築デザイン教育に含まれるが従来の土木デザイン教育には、あまり含まれない項目	建築デザイン教育、従来の土木デザイン教育の両者に含まれる項目
<ul style="list-style-type: none">・自分の考えを持つことの重要性・建築史・建設の文化・芸術的側面・設計の思想、理論・形態の美しさ（プロポーション、構図、仕上げ、ディテール、納まりなど）・場の読み方、コンテキスト、風土や歴史文化と意匠・プレゼンテーション能力・建設には直接関連しない文化的・教養的な内容・事務所の経営方法	<ul style="list-style-type: none">・機能と形態、空間構成・都市計画、まちづくり・構造、材料、施工・設備（光、音、熱など）・積算・法規・仕事に対する姿勢、情熱・施主との対話の姿勢、折衝の仕方、設計料の交渉方法・共同設計者やメーカーなどとの話し方・段取りの立て方・意志決定の方法

(3) 教育方法

(a) 設計演習

建築デザイン教育における設計演習の重要性が示唆された。この点は第4章で詳しく考察する。

(b) 事例見学

学生が優れた事例を数多く体験することの重要性が明らかとなった。このような機会は、初期案では事例見学で対応しており、その重要性が検証された。

(4) 教員

建築デザイン教育におけるプロフェッサーアーキテクトの重要性が示唆された。この点は第4章で詳しく考察する。

(5) 学生

前述のように、才能やものづくりに対する興味を持つ学生を、景観デザイン分野に集めることが望ましいが、その手段は未解明である。

(6) 教育環境・設備

建築家は学生時代の非常に多くの時間を製図室で過ごしていることが明らかとなった。このような創作の場の重要性は景観デザイン教育において

も同様だと考えられる。

初期案でも製図室の重要性を述べており、今回の調査によって検証された。

(7) 大学での教育と職場での教育の重要性

建築デザイン教育では、大学教育よりも職場での教育の方がはるかに重視されていることが明らかとなったが、これをそのまま景観デザイン教育にも適用することはできない。

建築分野では大学よりも設計事務所などの職場の方に優れた建築家があり、建築デザインをリードしているが、景観デザイン分野では、優れたデザインの専門家の数が少なく、彼ら（彼女ら）は、大学、設計事務所、役所などに分散している。そのため就職後は景観デザインを学ぶことが出来ない場合も多いと考えられる。

そのため、景観デザイン教育では、大学教育の重要性が建築よりも高いと考えられる。

また、建築においても、今後は大学院教育が重要であるということが共通認識のようである。これは土木にとっても同様であろう。

3.4.3 今後の課題

(1) プロフェッサーアーキテクト

インタビューの結果、「大学での建築デザイン教育においては、プロフェッサーアーキテクトが非常に重要な役割を果たしている」という仮説を見出すことができた。プロフェッサーアーキテクトは、大学での設計演習の指導以外にも、建築家の雰囲気や学生に伝えたり、人脈の形成においても、非常に重要な役割を果たしているようである。プロフェッサーアーキテクトの重要性については、第4章で考察する。

(2) 大学院教育

建築デザイン教育において、今後は大学院教育が重要であるということが共通認識のようである。しかし、大学院教育をどのように充実させるべきかということは、建築界にとっても今後の課題であることもわかった。欧米の大学院で学んだ経験のある建築家は、その充実ぶりを評価しているため、その教育内容を調査する必要があると感じられる。

参考・引用文献（第3章）

仙田満「住まい学大系 032 こどもと住まい（上）50人の建築家の原風景」
住まいの図書館出版局，1990

仙田満「住まい学大系 032 こどもと住まい（下）50人の建築家の原風景」
住まいの図書館出版局，1990

「淵上正幸もっと知りたい建築家 淵上正幸のアーキテクト訪問記」
TOTO 出版，2002

吉田研介「建築家への道」TOTO 出版，1997

ジョン・ピーター著，小川次郎・小山光・繁昌朗共訳「近代建築への証言」
TOTO 出版，2001

東京大学工学部建築学科安藤忠雄研究室編「建築家たちの20代」
TOTO 出版，1999

日経アーキテクチュア編「建築家という生き方 27人が語る仕事とこだわり」
日経 BP 社，2001

芦原義信「建築家の履歴書」岩波書店，1998

実川元子「こんな生き方がしたい 建築家 長谷川逸子」理論社，2001
「JA46：内藤廣」新建築社，2002

都市建築研究編集所編「素顔の大建築家たち 01 弟子の見た巨匠の世界」
建築資料研究社，2001

都市建築研究編集所編「素顔の大建築家たち 02 弟子の見た巨匠の世界」
建築資料研究社，2001

馬場璋造「日本の建築スクール」王国社，2002

内井昭蔵「建築科の講義」建築雑誌 1998年12月号

倉本龍彦「真剣勝負を見ている」建築雑誌 1998年12月号

第4章

教員とカリキュラムの大学間比較

第4章 教員とカリキュラムの大学間比較

4.1 調査の概要

4.1.1 調査の目的

第4章の目的は、1.7(3)「優れた建築家を多数輩出する大学と、そうでない大学は、何が違うのか？」という問題を明らかにし、それに基づいて、景観デザインのあり方：初期案の検証と改良への示唆を得ることである。

特に、建築デザイン教育の重点と考えられる「設計演習」と「プロフェッサーアーキテクト」について詳しく調査する。

4.1.2 調査の内容と方法

優れた建築家を多数輩出する大学とそうでない大学の、教育の相違点を調査するためには、どこに着目すべきだろうか？

考えられる調査項目は次の6つである。

- ・教育目標
- ・カリキュラム
- ・学生の量と質
- ・教員の量と質
- ・教育環境・設備
- ・教育成果の評価方法

教育目標については、各大学の建築系学科が公表している学科案内のパンフレットやホームページに、教育目標が記述されている。しかし、その多くは総花的な建前の記述であり、どの大学もあまり変わらない。文書として表現されている教育目標よりも、目標実現の手段としてのカリキュラムや教員を調査する方が重要だと思われる。

カリキュラムについては、大学から発行されているシラバスと時間割を調査する。現在活躍中の建築家が大学で学んだのはかなり前のことであるが、当時と現在でカリキュラムの変更はさほど大きくないことが、インタビューによって分かっている。

学生の量と質については、第2章で定員と偏差値を調査済みである。

教員の量と質に関しては、人数は各大学の資料によって調査できる。質に関しては、歴代の著名なプロフェッサーアーキテクトについて調査を行った。これは、デザイン教育を行うためには、実務経験のある教員が重要であると、いくつかの参考文献^[1]に述べられており、また、第3章で得られた仮説「大学での建築デザイン教育においては、プロフェッサーアーキテクトが非常に重要な役割を果たしている」に基づいている。

教育環境・設備については、調査できなかった。

教育成果の評価方法に関しては、これが重視されてきたのはごく最近のことであり、現在活躍中の建築家を育成した大学教育の比較検討項目としては重要でないため調査項目から除外する。

以上のように、第4章での調査項目は各大学のカリキュラム、および、

[1] 「プロフェッサーアーキテクトは教壇で」建築学会誌，1998年12月号など

教員の質と量である。

調査対象の大学を表 4-1 に示す。カリキュラムの調査、および教員数の調査の対象は、国立大学と私立大学から4校ずつ選択した。

教員の質としてのプロフェッサーアーキテクトの調査では、この8校に加えて、旧帝大と、優れた建築家（建築賞を受賞した建築家）を3人以上輩出している大学の大部分を調査した。

これらのなかで東京大学と早稲田大学は非常に多くの優れた建築家を輩出しており、他大学と比較を行う。

4.1.3 既往研究・参考文献

(1) カリキュラムに関するもの

大学のカリキュラムについて調査を行った既往研究としては、第1章でも紹介した、次の2つがある。

■日本建築学会「設計教育におけるわが大学の特色ある試み 1992 日本建築学会大会建築教育部門研究懇談会資料／設計教育調査及び結果の概要」1992

■日本建築学会「これからの計画系教育はどうあるべきか 計画系教育のビジョン 2002 年度日本建築学会大会（北陸）研究協議会資料／日本の計画系教育の状況 アンケート分析」2002

前者は、全国の大学の建築系学科のカリキュラムと設計課題について調査したもので、建築系（国立）、建築系（私立）、建設系、芸術系、住居系の5つに分類して集計している。それぞれの平均的な状況を把握することができるが、優れた建築家を多数輩出する大学と、そうでない大学の相違については集計されていない。また、個別の大学の調査票も掲載されており、「設計製図」科目の単位数や時間数が調査されているが、「設計製図」の定義が曖昧で、大学によって構造系の設計演習を含めている場合と、そうでない場合が見受けられるなど、調査に不十分な点が見られる。

表 4-1 調査対象大学

	大学名	カリキュラムの調査 教員数の調査	プロフェッサー アーキテクトの調査	
国立大学	北海道大学	○	○	
	東北大学		○	
	東京大学	○	○	
	東京芸術大学		○	
	東京工業大学		○	
	横浜国立大学		○	
	名古屋大学		○	
	京都大学	○	○	
	京都工芸繊維大学		○	
	大阪大学		○	
	神戸大学		○	
	九州大学		○	
	鹿児島大学	○		
	私立大学	早稲田大学	○	○
		東京理科大学	○	○
日本大学		○	○	
武蔵工業大学		○	○	
大阪工業大学			○	
日本女子大学			○	
広島工業大学			○	

後者は、全国の大学の建築系学科の設計教育の現状についてアンケートを行ったものであり、国立大学と私立大学に分けて集計されている。主な調査項目は、講座の種類と数、教員の地位と専門別の人数、教育の特色を表すキーワード、カリキュラムの量的調査（座学 - 演習、必修 - 選択、計画 - 構造 - 設備、などについて集計）、卒業後の進路である。全国の平均的な教育の状況を把握することができるが、数量的な調査であり、質については踏み込んでいない。また、優れた建築家を多数輩出する大学と、そうでない大学の相違については不明である。

(2) 教員に関するもの

大学教員については、下記の文献によって調査を行った。

- 「全国大学職員録」広潤社，昭和 29 年よりほぼ毎年刊行
- 各大学の 100 年史など

4.2 カリキュラム

調査対象大学のカリキュラムを調査し、計画・構造・設備・建築史・その他に分類した上で、講義（座学）、演習、およびその合計の単位数と時間数を算出した。調査結果を図 4-1 ～ 4-3、および表 4-2 に示す。

4.2.1 設計演習の時間数

まず、設計演習の時間数に着目する。単位数でなく、時間数に着目するのは、時間数：単位数の割合が、大学によってかなり異なる（特に設計演習科目ではその差が大きい）ため、比較のためには、単位数よりも時間数が適切だと思われたためである。

国立大学のなかでは、東京大学の設計演習の多さが際だっている。また私立大学では、早稲田大学の設計演習の時間数は非常に多いが、他の大学でも設計演習が充実していることがわかる。

第3章での建築家に対するインタビューでは、設計演習の重要性が指摘されていたが、この調査結果はそれを裏付けるものとなっている。一方、京都大学は設計演習の量は比較的少ないが、早稲田大学以外の私立大学を上回る人材を輩出^[2]しており、設計演習の時間数が支配的なものとは必ずしも言えないことが分かる。

[2] 第2章の図 2-6 ～ 2-8 を参照

聞き取り調査の結果、カリキュラムで設計演習に割り当てられた時間の全てに、教員が製図室にいるわけではないようである。したがって、設計演習の時間が長いからといって、教員が長い時間教育を行っているとは限らない。しかし、少なくともこの時間は他の講義はないわけであり、学生のやる気次第で設計演習に注力できるということは重要であろう。

[3] 提言の全文は資料編に掲載した

なお、建築学会による「設計教育のあり方についての提言^[3]」では、スタジオによる設計演習の時間数として、学部での総時間数 540 時間、大学院での総時間数 540 時間、合計 1,080 時間を推奨している。

4.2.2 建築計画関連の講義の単位数

建築計画関連の講義の単位数を比較すると、東京大学では設計演習とは逆に講義が非常に少ない。他の大学では、どこも 15 単位前後となっている。

4.2.3 分野のバランス

図 4-3 を見ると、どの大学のカリキュラムも、時間数の多少の違いはあるものの、全体としてはよく似ていることが分かる。

表 4-2 各大学の講義・演習の単位数 (学部4年間の合計)

	北海道大学	東京大学	京都大学	鹿児島大学	早稲田大学	東京理科大学	日本大学	武蔵工業大学
計画・座学	15	6	16	8	18	18	18	14
計画・演習	11	22	17	12	29	23	14	28
計画・小計	26	28	33	20	47	41	32	42
建築史	4	7.5	6	4	10	6	10	6
構造・座学	28	27	30	26	46	36	44	38
構造・演習	6	7	4	2	10	13	9	8
構造・小計	34	34	34	28	56	49	53	46
設備・座学	4	12	12	14	12	12	12	14
設備・演習	2	3.5	4	2	8	9	4	2
設備・小計	6	15.5	16	16	20	21	16	16
卒業論文・設計	8	10	単位なし 必修	8	4	6	6	6
その他・座学	37	1.5	18	34	16	16	15	14
その他・演習	6	2	2	2	2	6	8	10
その他・小計	43	3.5	20	36	18	22	23	24
座学・合計	88	54	82	86	102	88	99	86
演習・合計	33	44.5	27	18	53	57	41	54
総計	121	98.5	109	104	155	145	140	140
卒業要件・教養	54					26	42	44
卒業要件・専門	82			80		96	78	60
卒業要件・その他						8	10	20
卒業要件・合計	136	84	132	124	124	130	130	124

表 4-3 各大学の講義・演習の時間数 (学部4年間の合計)

ただし、卒業研究・卒業設計は含まない

	北海道大学	東京大学	京都大学	鹿児島大学	早稲田大学	東京理科大学	日本大学	武蔵工業大学
計画・座学	169	90	180	90	203	203	203	158
計画・演習	360	865	473	405	945	743	698	608
計画・小計	529	955	653	495	1148	946	901	766
建築史	45	113	68	45	113	68	113	68
構造・座学	315	405	338	293	518	405	495	428
構造・演習	135	188	90	45	225	383	338	158
構造・小計	450	593	428	338	743	788	833	586
設備・座学	45	180	135	158	135	135	135	158
設備・演習	45	94	90	45	180	293	158	23
設備・小計	90	274	225	203	315	428	293	181
その他・座学	450	23	203	338	180	180	180	158
その他・演習	113	45	45	45	23	180	203	113
その他・小計	563	68	248	383	203	360	383	271
座学・合計	1024	811	924	924	1149	991	1126	970
演習・合計	653	1192	698	540	1373	1599	1397	902
総計	1677	2003	1622	1464	2522	2590	2523	1872

図 4-1 建築計画・意匠関連の講義の単位数の比較

*学部4年間の合計

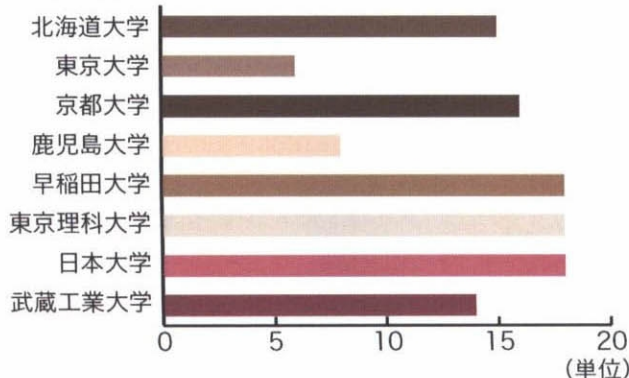


図 4-2 建築計画・意匠関連の設計演習の時間数の比較

*学部4年間の合計 *卒業設計は含まない

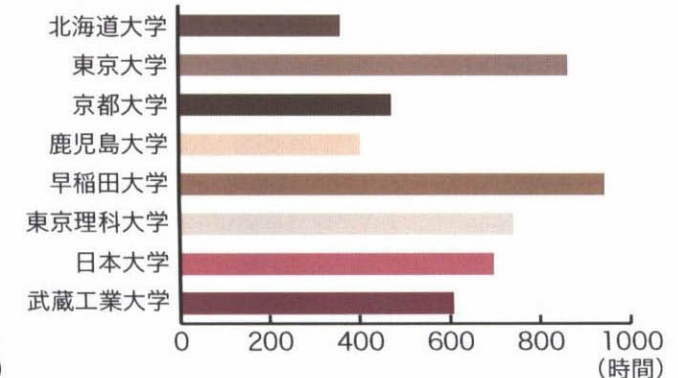
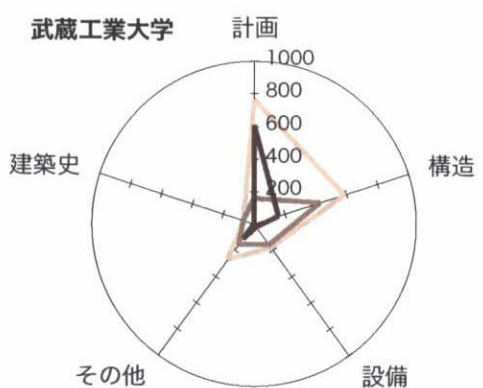
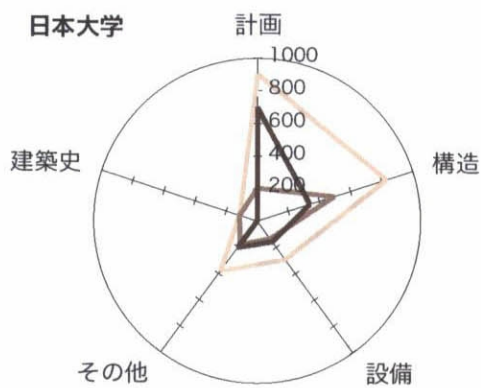
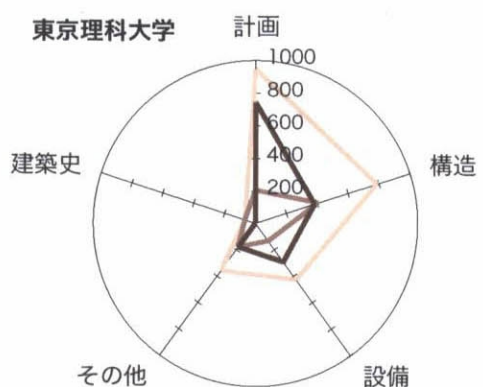
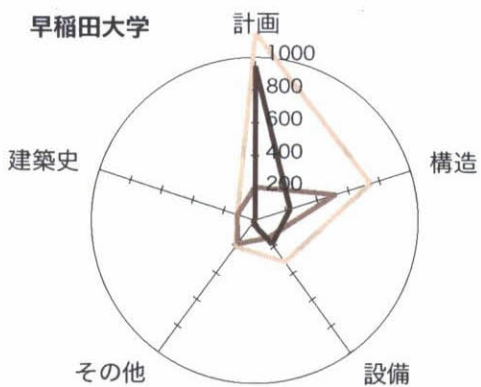
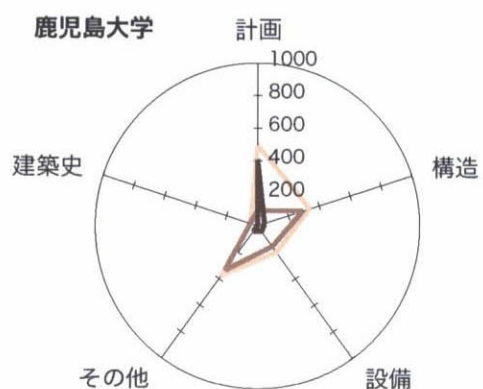
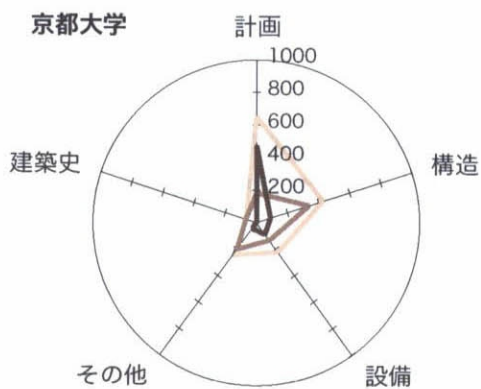
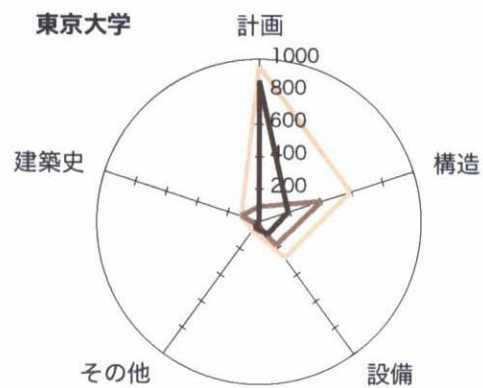
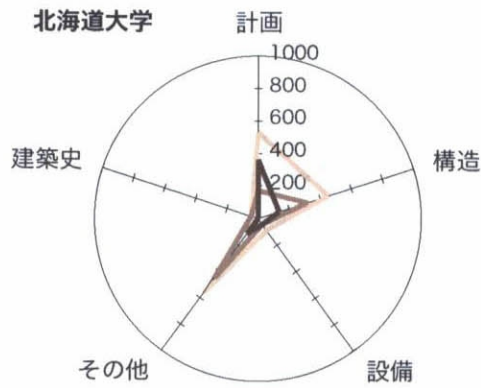


図 4-3 大学のカリキュラム比較 (分野ごとの講義・演習の時間数の比較 数字は学部4年間の合計時間数)
 各大学のカリキュラムを調査し、計画・構造・設備・建築史・その他に分類した上で、講義(座学)、演習、およびその合計の時間数をグラフに表現した。

*卒業論文・卒業設計は含まない

*自然科学やコンピュータリテラシーなどが専門科目となっている場合、専門科目として集計していない。



凡例 座学 演習 合計

4.3 教員の量と質

4.3.1 教員の人数の比較調査

各大学の教員数と学生数、および両者の比率を表 4-4 に示す。

国立大学は、教員1人あたり2～4人程度の学生数となっており、私立大学では5～10人程度である。これを見る限りでは、教員の量と、優れた建築家の輩出とは、関係がないといえる。

しかし、第3章の建築家に対するインタビューでは、多くの建築家がアルバイトや就職後の実務経験におけるマンツーマンに近い実務教育体制を重視している。また、私立大学における大人数での設計演習では、実際に講評を受けるのは、力量のある1割程度の学生のみであって、残りの大多数の学生は、それを聞いているだけというのが実態である。

したがってデザイン教育は、学科の定員とは別に、優秀な少人数の学生を対象として行われている。最近では欧米に倣って、スタジオ制の少人数教育を実施する方向に進みつつある。たとえば、建築学会では次のような提言を行っている。

設計教育の基本となるものは教員から学生への個別の直接指導です。大人数のクラスあるいはスタジオ編成ではそのような教育は不可能となります。

授業時間全体の中で、十分な時間数が設計の授業に割りあてられなければなりません。UNESCO/UIA の国際推奨基準では、専門教育においては全体の半分以上がスタジオ（設計作業室）での授業に当てられることが求められていますが、日本の多くの大学ではその水準に達していないのが現状だと言えます。

(中略)

学生ひとりひとりに対して教員が十分なコンタクトをとりながら設計の授業を行うためには、教員ひとりあたりの学生の数は適切な数に制御され、またその時間は授業時間割の中で十分な長さがとられていなければなりません。(注 そのひとつの推奨値としては、教員一人が、直接設計作業室で指導する学生数 16～20人、1週直接学生に接する時間は6～8時間、学部での総時間数 540時間、大学院での総時間数 540時間、合計 1,080時間が目安となるでしょう。)

(日本建築学会 設計教育のあり方についての提言 (前出)より引用)

表 4-4 各大学の教員数と学生数 (教員数には非常勤講師は含まない。学生数は1学年の人数)

	北海道大学	東京大学	京都大学	鹿児島大学	早稲田大学	東京理科大学	日本大学	武蔵工業大学
教授	11	12	18	7	15	8	19	8
助教授	11	11	18	6	3	4	4	3
講師	0	1	3	0	0	1	9	3
教員数合計	22	24	39	13	18	13	32	14
学生数	45	60	90	55	180	117	140	80
学生数/教員数	2.0	2.5	2.3	4.2	10.0	9.0	8.8	5.7

今後、大学の学部、大学院での教育が、職場での実務教育と同様の重要性を持つためには、少人数での設計演習の充実が必須であろう。

4.3.2 プロフェッサーアーキテクトの比較調査

[4] ここでは、著名なプロフェッサーアーキテクトとして、建築賞を受賞した経歴を持つ建築家と、松村貞次郎・近江栄・鈴木博之・藤森照信監修「日本の建築家」新建築社、1981に収録の建築家が、大学の常勤の教員となっている場合とした。

教員の質を表す指標として、プロフェッサーアーキテクトの量を調査した。優秀な建築家を輩出する大学には、著名なプロフェッサーアーキテクトが多い。表 4-6 に、各大学の歴代の著名なプロフェッサーアーキテクト^[4]の一覧を示す。

特に最近では、多くの大学でプロフェッサーアーキテクトが増えてきている。建築設計を教育するためには、実務経験のある常勤の教員が必要であることが多くの大学に認識されつつある。

4.3.3 プロフェッサーアーキテクトによる教育効果の分析

1950～1980年代の大学別のプロフェッサーアーキテクトの量と、同時期に学んだ学生で、卒業後に建築賞を受賞した建築家の人数との関係性を分析した（表 4-5、図 4-4）。分析の時期を1950～1990年代としたのは、多くの大学が昭和24年の国立学校設置法の公布後に現在の形となっているため、分析の時期を1950年以降とし、また、建築賞の受賞者の大部分は1980年代以前に大学を卒業しているため、分析時期を1980年代までとした。

表 4-5、図 4-4 1950～1980年代のプロフェッサーアーキテクトの量と、同時期に学んだ受賞建築家の人数の相関

大学別のプロフェッサーアーキテクトの人数を表 4-6 に、建築賞を受賞した建築家が大学で学んだ時期を表 4-7 に示す。

分析結果はプロフェッサーアーキテクトの存在が優れた建築家の育成のために決定的な役割を果たしていることを示している。

大学	プロフェッサーアーキテクト (人×年)	受賞者数 (人)
北海道大学	37	3
東北大学	48	3
東京大学	153	32
東京芸術大学	110	19
東京工業大学	70	9
横浜国立大学	43	6
名古屋大学	26	0
京都大学	99	15
京都工芸繊維大学	42	4
大阪大学	0	5
神戸大学	0	7
九州大学	45	1
東京理科大学	12	1
日本大学	155	12
早稲田大学	268	39
武蔵工業大学	38	6
大阪工業大学	20	3
日本女子大学	0	3
広島工業大学	0	3

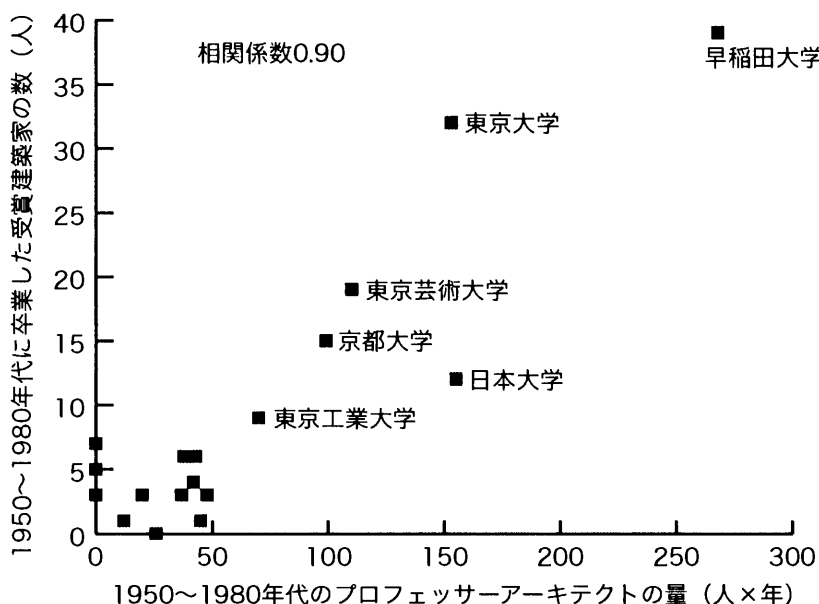


表 4-6 1950～1980年代の大学別著名なプロフェッサー-アーキテクトの人数

*著名なプロフェッサー-アーキテクトとは、建築賞を受賞した経歴を持つ建築家と、松村貞次郎・近江栄・鈴木博之・藤森照信監修「日本の建築家」新建築社、1981に収録の建築家が、大学の常勤の教員となっている場合とした。

*就任・退官時期が不明の教員もあり、分かる範囲を表に含めている。

*旧帝大と、建築賞受賞者を3人以上輩出している大学の一部についてまとめた。

*建築学科以外の学科の教員は表に含まれない。

大学	教員名	大学で教育を行っていた期間(年)
北海道大学	太田実	37 (1950-1986)
	合計(人・年)	37
東北大学	坪井善勝(兼任)	16 (1955-1970)
	寛和夫	32 (1958-1989)
	合計(人・年)	48
東京大学	岸田日出刀	10 (1950-1959)
	内田祥哉	32 (1954-1985)
	吉武泰水	24 (1950-1973)
	藤島玄治郎	11 (1950-1960)
	太田博太郎	24 (1950-1973)
	丹下健三	13 (1950-1962)
	芦原義信	11 (1970-1980)
	榎文彦	9 (1979-1987)
	香山寿夫	19 (1971-1989)
	合計(人・年)	153
	東京芸術大学	岡田捷五郎
吉田五十八		12 (1950-1961)
中村伝治		4 (1951-1954)
天野太郎		21 (1963-1983)
清家清		8 (1978-1985)
奥村昭雄		26 (1961-1986)
藤木忠善		26 (1964-1989)
黒川哲朗		3 (1987-1989)
合計(人・年)		110
東京工業大学	谷口吉郎	15 (1950-1964)
	清家清	24 (1954-1977)
	篠原一男	16 (1962-1985) 注：期間中8年間不在
	茶谷正洋	10 (1970-1979)
	坂本一成	5 (1985-1989)
	合計(人・年)	70
横浜国立大学	江国正義	5 (1952-1956)
	河合正一	35 (1952-1986)
	北山恒	3 (1987-1989)
	合計(人・年)	43
名古屋大学	柳沢忠	26 (1964-1989)
	合計(人・年)	26
京都大学	森田慶一	9 (1950-1958)
	増田友也	28 (1951-1978)
	川崎清	13 (1958-1970)
	巽和夫	24 (1966-1989)
	加藤邦男	25 (1965-1989)
	合計(人・年)	99
京都工芸繊維大学	福田朝生	6 (1950-1955)
	中村昌生	28 (1962-1989)
	西村征一郎	8 (1982-1989)
	合計(人・年)	42
大阪大学	なし	
	合計(人・年)	0
神戸大学	なし	
	合計(人・年)	0
九州大学	丹下健三(兼任)	3 (1956-1958)
	光吉健次	33 (1955-1987)
	竹下輝和	9 (1981-1989)
	合計(人・年)	45

大学	教員名	大学で教育を行っていた期間(年)
東京理科大学	奥平耕造	1 (1971-1971)
	村井啓	3 (1972-1974)
	芦原義信	8 (1979-1986)
	合計(人・年)	12
日本大学	前川国男	12 (1957-1968)
	富川英二	34 (1952-1985)
	宗政敏	6 (1962-1967)
	森田慶一	2 (1963-1964)
	斎藤公男	23 (1967-1989)
	若色峰郎	23 (1967-1989)
	関沢勝一	23 (1967-1989)
	佐藤孝義	1 (1970-1970)
	小林美夫	31 (1959-1989)
	合計(人・年)	155
	早稲田大学	明石信道
内藤多仲		3 (1950-1952)
佐藤武夫		3 (1950-1952)
今井兼次		11 (1954-1964)
今和次郎		6 (1954-1959)
安藤勝男		35 (1954-1988)
武基雄		31 (1950-1980)
伴野三千良		3 (1950-1952)
松井源吾		40 (1950-1989)
吉阪隆正		31 (1950-1980)
池原義郎		25 (1965-1989)
穂積信夫		31 (1959-1989)
田中弥寿男		24 (1966-1989)
石山修武		2 (1988-1989)
合計(人・年)	268	
武蔵工業大学	高橋てい一	10 (1957-1966)
	林昭男	4 (1962-1965)
	広瀬謙二	24 (1966-1989)
合計(人・年)	38	
大阪工業大学	高橋慶夫	9 (1957-1965)
	三宅晋	11 (1974-1984)
	合計(人・年)	20
日本女子大学	なし	
	合計(人・年)	0
広島工業大学	なし	
	合計(人・年)	0

表 4-7 建築賞を受賞した建築家が大学で学んだ時期
卒業年の不明な者を含まないが、生年から卒業年を類推した者を含む

大学	卒業年代									合計
	1910～	1920～	1930～	1940～	1950～	1960～	1970～	1980～	1990～	
東大	堀口捨巳 竹腰健造	岸田日出刀 藤島亥治郎 前川国男 谷口吉郎 坂倉準三	坪井善勝 太田博太郎 山崎兌 桑師寺厚 大江宏 丹下健三 小坂秀雄	国方秀男 西澤文隆 増沢洵 岡田恭平 杉浦克美 高橋てい一 芦原義信 佐野正一 大谷幸夫 大高正人 大沢弘 内田祥哉	鬼頭梓 楨文彦 鹿島昭一 船越徹 磯崎新 岡田新一 原広司	横山正 伊東豊雄 松永安光 中村勉 浜田信義 香山壽夫 小倉善明 三井所清典 水野一郎 石井和紘	大江匡 團紀彦 近角真一 深尾精一 大野秀敏 湯澤正信 牛田英作 隈研吾	山下博満 伊藤恭行 宮本佳明 青木淳 西島正樹 千葉学 小泉雅生		58
早大	村野藤吾 今井兼次		安田臣	吉阪隆正 安東勝男 横山公男	高野重文 佐藤昌 宮本忠長 穂積信夫 菊竹清訓 阪田誠造 池原義郎 内井昭蔵 太田隆信 澤柳伸 鈴木恂 寺本敏則 古田敏雄	阿部勤 相田武文 長島孝一 木島安史 早川邦彦 小宮山昭 大山尚男 山崎泰孝 室伏次郎 高間三郎 小野威 石山修武 平倉章二 鈴木了二 重村力	本多友常 若松久男 江川直樹 宮崎浩 古谷誠章 内田祥士 粟生明 岡部憲明 内藤廣 野原文男	八木佐千子	45	
東芸大	前田健二郎	吉田五十八	海老原一郎 吉村順三	清家清	宮脇檀 曾根幸一 柳澤孝彦 吉田桂二	黒川哲朗 村上美奈子 村山博美 六角鬼丈 片山和俊	野田俊太郎 山本圭介 川村純一 芦原太郎 北川原温 松岡拓公雄 堀越英嗣	吉松秀樹 彦根明 堀啓二	八島正年	25
京大			浦辺鎮太郎 馬場知己 山根正次郎		川崎清 巽和夫 黒川紀章 藤川壽男 瀧光夫	丹田悦雄	高松伸 岸和郎 渡辺真理 櫻井潔 浜田徹 高田光雄	高橋晶子 小嶋一浩 柿本英樹		18
日大			伊藤喜三郎		山本長水	渡辺明 城戸崎博孝 椎名英三 水谷碩之 高宮真介 播繁 山本理顕	今村雅樹 白江龍三 横河健	堀尾浩		13
東工大					篠原一男 林昌二 戸尾任宏 山下和正	清田育男 仙田満 坂本一成	武田光史 岡本慶一			9
神戸大						狩野忠正 毛綱毅曠 真喜志好一 南石周作 末吉栄三 柏木浩一 吉羽逸郎				7

大学	卒業年代									合計
	1910～	1920～	1930～	1940～	1950～	1960～	1970～	1980～	1990～	
武蔵工大					明智克夫		西田勝彦 浅石優 新居千秋	本多豊 手塚貴晴	手塚由比	7
横国大						押野見邦英	渡辺誠 飯田善彦 北山恒	工藤和美 西沢立衛		6
京都工繊大				山本忠司		中嶋龍彦 西村征一郎 永田祐三	川北英			5
阪大					東孝光	安原秀 中筋修 小島孜	池上敏郎			5
日女大					林雅子		平倉直子 妹島和世		赤松佳珠子	4
東北						針生承一	藤森照信 渡部和生			3
北大						後藤達也	鳥海良晴	渡辺治		3
広島工大							村上徹 石田敏明 西宮善幸			3
大阪工大						遠藤剛生	杉原繁 高砂正弘			3
法政						武者英二 谷口吉生 葉祥栄	古川裕久			2
慶応										2
芝浦工大							大倉靖彦	磯矢孝		2
近畿							多田善昭	中村勇大		2
名古屋工大		伊藤鉦一								1
福井						渡辺豊和				1
立命館					出江寛					1
関東学院						長谷川逸子				1
九大							竹下輝和			1
明大						久保寺敏郎				1
工学院						秋元敏雄				1
千葉大						大倉達也				1
都立大						藤木隆男				1
東京理科大							森谷重雄			1
京都府立							吉羽裕子			1
多摩美大							廣瀬正人			1
武蔵野美大							近藤道男			1
大阪芸大							久保清一			1
東京電機大							古見演良			1
名城大							高崎正治			1
豊橋技科大								若林亮		1
他			白井晟一 近藤正志	石井修		中村昌生	木下庸子 木村博昭 竹原義二			7
総数	5	7	16	18	38	68	68	23	3	246

氏名の背景が赤い者は、受賞建築家。それ以外は「日本の建築家」収録の建築家

赤い帯は受賞後のキャリア（赤くない部分は受賞前）

グレーの帯は講師・助教授

黒い帯は教授

大学名	氏名	1977	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	2000
横浜国大	中村順平 江国正義 河合正一 北山恒																								
名大	柳沢忠																								
京都大学	武田五一 藤井厚二 森田慶一 増田友也 川崎清 巽和夫 加藤邦男 小堀輝二 内井昭蔵 高松伸 高田光雄																								
京工繊大	武田五一 福田朝生 中村昌生 西村征一郎 岸和郎																								
大阪大学	なし 環境工学科に川崎清、東孝光がいる時期がある																								
神戸大学	狩野忠正 重村力																								
九大	丹下健三 光吉健次 竹下輝和																								

4.4 結論

4.4.1 調査結果

(1) 優れた建築家を多数輩出する大学では、設計演習に非常に多くの時間を割いている

東京大学や早稲田大学のような、優れた建築家を多数輩出する大学では、設計演習に非常に多くの時間を割いていることが明らかとなった。一方、京都大学のように、設計演習の時間が比較的短くてもある程度の数の建築家を輩出している例もあり、設計演習の時間の長短は、必ずしも支配的なものではない。

(2) プロフェッサーアーキテクトの存在は、決定的に重要である。

教員1人あたりの学生数は、国立と私立では大きな差があるが、そのことは、優れた建築家の育成には、あまり関係がないことが明らかとなった。

一方、教員の質としての、優れたプロフェッサーアーキテクトの存在は、優れた建築家を育成するために決定的な役割を果たしていることが明らかとなった。優れた建築家を輩出する大学では、多くの才能豊かなプロフェッサーアーキテクトが学生の教育に関わっている。

4.4.2 景観デザイン教育のあり方：初期案の検証と改良への示唆

調査結果より、景観デザイン教育のありかた：初期案について、いくつか検証され、また示唆を得ることができた。

(1) 教育方法 —設計演習—

初期案では、設計演習増やす必要性は認識していたものの、その重要度や時間数の目安が不明だった。

今回の調査により、建築デザイン教育における設計演習の重要性が示唆されたが、その時間数が必ずしも優れた建築家の輩出の要件として支配的なものではないことも分かった。とはいえ、現在は土木関連学科の設計演習の時間は建築学科に比べて非常に少なく、これを大幅に増やすことが望ましいことには違いがないと考えられる。

設計演習の時間数の目安は、判断が困難な問題である。というのは、建築の設計演習の時間数が、土木に比べてはるかに多く、容易にその差を詰めることができるとは考えられないからである。優れた景観デザイン教育を行うためには、設計演習の時間数を増やすことが望ましいが、その時間数は建築との比較で判断できるものではなく、土木関連学科の教育内容や教育方法を全体的に見直し、そこでの議論に基づいて判断するものであろう。

(2) 教員 —プロフェッサーアーキテクト—

初期案ではプロフェッサーアーキテクトの必要性を認識していたものの、その重要度や、常勤または非常勤のどちらが望ましいかという点が不明だった。

今回の調査により、建築デザイン教育におけるプロフェッサーアーキテ

クトの重要性が検証された。これは景観デザイン教育でも同様だと考えられる。

また、プロフェッサーアーキテクトの役割が設計演習の指導だけでなく、雰囲気伝えることや人脈を築くことまで及ぶことを考えれば、常勤の教員であることが望ましいと考えられる。

参考・引用文献（第4章）

「プロフェッサーアーキテクトは教壇で」建築学会誌，1998年12月号

日本建築学会「設計教育におけるわが大学の特色ある試み 1992 日本建築学会大会建築教育部門研究懇談会資料／設計教育調査及び結果の概要」1992

日本建築学会「これからの計画系教育はどうあるべきか 計画系教育のビジョン 2002 年度日本建築学会大会（北陸）研究協議会資料／日本の計画系教育の状況 アンケート分析」2002

「全国大学職員録」広潤社，昭和29年よりほぼ毎年刊行

日本建築学会「設計教育のあり方についての提言」2003

松村貞次郎・近江栄・鈴木博之・藤森照信監修「日本の建築家」新建築社，1981